

TEN No.26

May-2024

TERADA Fumie

YUUKI Maiko

AYUMURA Syou

NAKAMURA Fumie

TSUSAKA Haru

目次

運転どうする？

寺田文恵

006

オレンジ

悠希マイコ

009

SPOT

鮎村尚

033

背筋

中村郁恵

074

いずこよりいずこへ

津坂格

093

編集室の窓明り

126

フォント

表紙「椽」：FC淡古印体

扉 英数字：Segoe Script

作 品：游明朝

文芸同人誌「椽」

第二十六号

運転どうする？

寺田文恵

今のところ後期高齢に指先が掛かっているといった年齢であるが、団塊世代の先輩諸氏がご活躍の中、年寄りを気取ってのんびり過ごす贅沢は、しばらくお預けのようである。

それでも身体の衰えは自覚しないわけにもいかず、仲間うちでは運転免許返納のタイミングを計っている者も多い。都会暮らしの友人らは結構返納しているようだ。

大都市なら公共交通機関が充実しているから、自家用車に執着しなくても暮らしに不自由はない。高齢者は年間数万円の支払いで、都内・市内の公共交通機関は乗り放題。私に言わせれば、〃おびただし数〃の美術館・博物館の入館料も無料だという。「これこれ」と手渡してくれた『運転経歴証明書』なるものを眺め、少々羨ましい気持ちになる。

運転歴は五〇年を超えた。私の生活の中で車は、居てくれるのが当たり前の相棒。だがその付き合いも終盤になってきたことを認めなければならぬだろう。

車両本体価格に加え、税金・任意保険料・車検・ガソリン代等、車を所有するための経費を考えると、必要なときには営業車を利用した方がコストパフォーマンスはいいのではないかと考えたこともあったが、最近ドライバーさんの不足で、運輸業界が四苦八苦しているといった情報に接すると、今後はこちらの都合どおりに来てくれるかどうか不安になる。お金さえ払えば何事も叶うと考えるのはあまりにも不遜。迂闊に免許返納もできないなとジレンマに陥る。

近い将来をシミュレーションしてみる。趣味の延長のように営業しているささやかな焼き菓子の店を畳めば、車の必要性は激減する。日常の面白い物は、ネット注文でスーパリーの宅配サービスを利用すれば事足りる。病院通いの必要が生じたらと考えてみるも、そもそも自分の具合が悪いのに、自分で運転するのはシンドイし、危険だろうよと首を振る。

先日、地元の小さなスーパーで、お婆さん同士（年寄りの私が見ても、「お婆さん」としか形容できないお二人だった）が立ち話をしている場面に遭遇した。一人が大きな声で、「わたしねえ、この間免許の更新にいつてきたの。認知症の検査も大丈夫だったさ」

レジで支払いをしながら、それはそれは、と素直にリスpekt。が、続く言葉に立ちすくむ。「九五だから、きつと市内でも一番高齢の女性ドライバーじゃないかな」

お達者なのは喜ばしいことだが、このお婆さんの周辺で暮らす人たちの憂鬱はただ事ではないだ

ろうと察した。

『せいぜい八〇歳までだな』

私は自分の人生のちよつと先に線を引いた。それまでに完全自動運転の車が手軽に購入できればいいけれど、と実現する可能性なきにしもあらずの夢を見ながら。

オレンジ

悠希マイコ

二十一時を過ぎている札幌中心部のオフィスビルを出ると、社員証を丁寧バッグへ仕舞った。正面に老舗ホテルの文字が薄く灯っている。車寄せにはタクシーが数台止まっていた。昨年には見られなかった光景だ。

コロナ禍の今をようやく理解し、代り映えない毎日を憂鬱に想うことはなくなっていた。五十歳の独身であるわたしにとって、何かを期待するとか、夢とか希望とかそんな言葉を真剣に言いあえる人はいない。そのことを特に感じてきたのは五十歳を過ぎた頃だったろう。

近しい友人には専業主婦もいれば、シングルマザーとなり懸命に働いている者もいる。家族を持たず仕事に邁進している幼馴染もいる。

結婚をすることなく、子を持たず生きてきた。タイミングがことごとく合わなかったのだと言いつきをしそうになるが、この選択は自らしたのだと十分納得している。

空を仰ぐと細い月が薄暗い街に立つわたしを見ていた。

唐突にこの街にも金木犀が植えられていると訊いたことを思い出す。北海道では珍しいことだ。今夜こそ、その道を通ってみようか。毎年、思い出してはいるのに、家と逆方向ということ、幾度も季節を通り過ぎてしまった。

秋から冬にかけて冷えが急速に厳しくなる気候の中で、本当に金木犀が植えられているのか半信半疑だったこともある。コロナ禍になってからは特に、誰が待っているわけでもないのに、寄り道をせず帰宅していた。

このどうしようもない感情を誰かにわかってもらいたいとは思っていない。おそらく、あの人やこの人へ、話したところで理解できないだろう。あの人もこの人も、実際わたしのそばにいるわけでもない。

静かな部屋にるのが好きだし、暖色の灯りが一つ点していると安心する。毎朝、掃除をしている床が光っていることを確かめている。

ひとりで落ちてしまう自分の髪の毛が気になってどうしようもない。セミロングの髪形は数年変わっておらず、白い床に目を凝らし摘まみながら歩く。

ソファアのクッションがきれいに並べられていると少しだけ満足する。和室の小さな仏壇に二つ

の位牌があつて、手を合わせ白檀香が漂うと大きく息を吸い静寂を確認する。ゆるく流れる煙の行方をじいーっと見つめ、気付けば灰になっているという繰り返しの日々。

仕事は午後から二十一時までのフルタイムで、十六時過ぎに一時間の休憩に入る。

毎朝、つまみ食いをしながらお弁当を作る。

意識し、外へ出て仕事をしていることで、辛うじて社会とのコミュニケーションをとっている。

今日の仕事は特に忙しかった。顧客から会社への問い合わせ内容をイヤホンで聞き取り、文字おこしをしている。新人教育も伴っているので、八時間、マンツーマンで指導に当たる日もある。

九月に入社したばかりの、担当した二十歳の船木健人は華奢であどけなさがあった。派遣会社からの三か月契約の人員ではあるが、更新しながら長く務めてもらいたい。それはわたしの指導評価にもかかわってくる。

飽きさせないように、けれどもしつかりと説明し仕事の流れを覚えてもらいたい。いつもそうなのだが、その人がどういう人間なのかという見極めに常に気を配っている。

表情や話し方、所作で勝手に判断しているわけだが、船木は素直な青年に感じた。黒いパンツに清潔な白いシャツを着て、両足を乱すことなく椅子に座る。

「アルバイトの経験ありますか」

研修中に当たり障りのない会話を挟むことにしている。

「はい。小学校のころから働いていました」

「小学校」

思わず聞き返してしまった。

「新聞配達から始まって、ラーメン屋、居酒屋。色々です。直近まではコールセンターとコンビニを掛け持ちしていました」

「偉いですね」

あどけない表情でも、落ち着いた雰囲気があるのは、長く社会に携わり大人の中にいたせいなのだろうか。

「仕事が決まってほっとしています。社会保険は大事です」

なるほど、社会保険か。わたしがそういうことをようやく気にするようになったのは両親が逝ってからだから、この子の方が遥かにしっかりしている。

「お疲れさまでした。チョコレート食べますか。よかつたらどうぞ。また明日」

「わー。ありがとうございます」

マスクの中で微笑んだことがわかった。大きな黒目が細くなった。

彼が小学生と言えば、今からほんの十年前だ。友人の子どもたちは、塾やダンス、サッカーなどの習い事をさせていて、彼女たちはその送迎に必死になっていた頃であろう。はたして船木がどのような事情で幼い頃から仕事をしていたのかと気になった。

気にしたところでどうってことはないのだが、と思いながら金木犀を目指す。

途中で、スマートフォンを覗いている女性が目に入った。二か月前に担当した橋本理子だった。おでこを隠した黒髪ボブに黒マスク、リュックも服も黒い。

目が合った。

「お疲れ様」

「あ、川瀬さん。お疲れ様です」

鼻にかかった声を聞き、何も言わずに通り過ぎればよかったと思った。

「大丈夫」

「大丈夫です」

「何か困ったことでも」

返事がなかった。余計なことを言ってしまった。

「この先に金木犀が植えられているって聞いたので、探してみようかと。一緒にどう」

「金木犀ですか。はい、行きます」

わたしたちは言葉もなく歩き出した。橋本は童顔だけど三十歳だ。可愛い顔をしている。そういえば、結婚はしているが別居中だと言っていた。

教えてもらっていた場所に金木犀は見当たらなかった。街路樹の一番端に植えられているはずだった。

「ごめんね、ちゃんとリサーチしてなくて」

「いいえ。お散歩できてよかったです。ありがとうございます。おかげで落ち着きました。一緒に暮らしている妹のアパートへ元旦那が押しかけて来たって連絡があったのです。ああ、まだ元じゃないですけど。離婚話が全く進まなくて。すみません、こんな話」

特別困った様子もなくさらっと言う。

「もしよかったら、うちに来ますか」

自分でも驚いたが、取り返しがつかない。友達でもない素性の知れない派遣先のおばさんの言葉に彼女の方がよほど驚いただろう。

理子はしかし、こくりと頷いた。

両親が逝ったあとの4LDKのマンションは、わたしには広すぎた。

実際に使っている部屋といえ、リビングと自分の部屋だけだ。育った一軒家を売却し、市電通り沿いのマンションを購入したのは十年前だから、父が元氣な頃だ。

おそらくは、独り身のわたしが年老いても困らないようにと考えたのだろう。便利がよく、管理体制もしっかりしている。

三年前に亡くなった母は、マンション生活に憧れていたから短い時間だったけれど楽しめたと思う。戸建てならではのご近所づきあいや、雪かきの苦勞から解放された。

父が亡くなってからの母との時間は、いつもぎくしゃくしていた。父の存在があったからこそ成

り立っていたのだと今は思う。わたしがそう考えているのだから、おそらくは母も感じていたかもしれない。

傍で母の老いを感じそれがとても嫌だったのだ。母の耳が遠くなり、わたしの声の音量が大きくなることや、洗濯をしてくれても干しなおす自分が嫌だった。せっかく支度をしてくれた食事のすべてがわたしの口に合わなくなつて、母の味覚を疑う言葉をうっかり発し傷つけたこともあったと思う。

看取れたことだけが慰めになっている。その頃のわたしの精一杯は、母へ伝わっていたであろうと信じているが、実際、何を想つて逝つたかななどは考えないようにしている。

母の介護のため、長く勤めていた不動産会社を辞めた。いよいよ入院してからは毎日病院へ通つた。その生活に慣れた頃、時間の融通が利く今の会社へ勤めることにした。午前中に母の顔を見に行けるからだつた。亡くなってからもそのまま仕事を続けている。

こうして外へ出ていけば、急に倒れても通行人に発見されるだろう。

スマートフォンの緊急連絡先は、互いに了解を取り、背景が似ている幼馴染の亮子の番号を入れている。両親とも逝つた今、親戚と呼べる叔父叔母もすでに他界している。

弟夫婦がいるけれど、彼らの東京での生活を煩わしたくはない。

近しい人がいたとしても、わたしが頼るわけでもないだろう。

わたしの死後はマンションや、少ない貯金、保険金は弟へ行くようになっていくが、もう一つの

保険は、亮子を受取人に行っている。

互いに看取りあおうと誓い合った。入院や葬儀に関するお金が賄えるように。特別なことはしなくてもいいと言っても、あれこれと動くことになるだろうからその費用だ。戒名、通夜はいらなくとも、火葬代はどうしたってかかるのだから。この話は弟へきっちりと伝えていく。

亮子とは三歳からの付き合いだ。楽しいときも、恋に破れたときも、一緒に泣き笑い過ごしてきた。人材派遣会社のチームリーダーを担う亮子は、残り四年で定年を迎える。頑張って仕事をしてきた彼女を尊敬している。

三歳違いの弟は大学から東京にいてそのまま就職し結婚した。娘二人を持っている。コロナ禍になる前ですら、二年に一度、帰省する程度だったから、もう三年は会っていない。

姪たちは札幌にいる伯母さんがどのように暮らしているのかなんて考えたこともないだろう。彼女たちに最後に会ったのは母の葬儀場だった。

それぞれが独立するまでは母に代わり、お誕生日のお祝いとお年玉だけは送っている。弟から電話が来るときに近況報告をしあう。

母からの愛情をたっぷり受けた弟は優しい子に育った。わたしに対し意見をすることもなく、むしろ敬ってくれている。父にとっては自慢の息子だったろうとも思う。

娘のわたしがぱっとしない人生を送っていても、プラスマイナスゼロだと考えていたのかもしれない。

奥の部屋にシングルベッドを置いていた。弟が札幌出張に来た時にと用意した部屋だ。クローゼットに彼が幼い頃に使っていたものを詰め込んでいた母の気持ちに寄り添えず、早く片付けたいのにと思っていたものだ。

「この部屋を使ってください。整うまでうちに居ていいですよ」

頷いた理子は、ようやく笑顔を見せた。

特別な会話もなく電車に乗り、最寄りの電停で降りてからコンビニエンスストアに寄り、理子は必要なものを少し買った。残りご飯でチャーハンを作り二人で食べた。ビールも飲んだ。

「美味しい」と平らげた二人分の皿を洗いながら、自分以外の人の気配があるということは、色が增えるのだということ进行出した。

二人の生活になってから一か月が過ぎた。

川瀬さんと呼ばれていたわたしは、いつしか「佳美さん」と呼ばれるようになっていた。

十一月が過ぎて、ビルの外へ出るたびに月を探した。

理子とは部署が違うので、同じフロアーにいても顔を合わせることはめつたになつたが、家で会おうと嬉しかった。

食事を作る機会が增えて、ガスコンロの手入れを頻繁にするようになった。先日は一緒にスーパ

へ行った。父のセダンを手放さずによかったと思っている。

さて、今夜は何を作ろうかと考えながら、社員証を仕舞う。

暗い中、船木の姿に目が留まった。「お疲れ様です」と声をかけると、頭を下げてきた。

「お疲れ様です」と答えた語尾に覇気がない。

「どうしたの。大丈夫」

「はい。いいえ、それが大丈夫じゃなくて、ちょっと吐きそうです」

「戻ったらいいわ。一階のお手洗いへ」

船木はすぐに背を向けビルの中へ戻った。わたしはエントランス前の花壇に腰かけ待つことにした。十分程して、船木が出てきた。

「大丈夫ですか」

「ありがとうございます。楽になりました」

「仕事、しんどかったかな」

「慣れてきましたので大丈夫です。仕事のことではなくて。母親と電話していたら気分が悪くなっただけで」

「お母さん、心配しているんじゃないの」

「ふっ、まさか。その逆です。母親が男と引越ししたって話です」

「はあ、引越し」

「僕の荷物、捨てたっていう話です」

船木の表情を読み取りたかった。

「引っ越し先へ、帰るのね」

一瞬の静寂。

「住所教えてくれなかったです。僕、新しい男が来てから家へ帰っていなかったの、仕方ないです。僕も聞かなかったし。これからまた、ネカフェへ行きます」

「ネカフェ」

「机に伏せて寝ていますから背中が曲がりそうです。はは」

「そうなんだ。シャワーはついているのよね」

「シャワーあります。だからほら、荷物多いでしょう。このリュックの他にも、大きなリュックがロッカーに入っています」

「ふうん。洗濯はコインランドリーとか」

「干せないの、仕方なく乾燥機も回しています。再来月の給料が出たら部屋探しです」

「お部屋、探しているの」

「条件がありますから難しいです。保証とか、給与明細が直近三か月必要とかで」

かつて勤めていた不動産会社での知識が蘇る。二十歳で派遣社員、親と疎遠であれば、確かに保証会社の審査が必要だ。

「うちに、来ますか」

ラインで理子へ連絡を取った。

〈今夜からしばらく、船木君も住むことになりました。帰ったらまたお話します〉

〈了解です〉

可愛いスタンプが送られてきた。

家に着くと、理子は帰宅していた。玄関たたきにある黒いスニーカーが一足。リビングの間接照明が付いており、その中を漂う白檀香。わたしが帰宅する時間に彼女はこうして灯りをつけてくれている。そして自分の部屋にいた。自由に使っていると聞いたが遠慮しているのだ。部屋には小型のテレビを置いているので観ているのだろう。

「理子ちゃん」

自分の声が響く。

こんな声だったか。しばらく声を張り上げることなんてなかった。母が生きていた頃は毎日大声で呼んだものだ。

スエット上下を着た理子がリビングへ入ってきた。

「こんばんは。お疲れ様です」

天然パーマなんですよと言っていた船木が髪を撫で挨拶すると、不思議そうな表情をした理子が

次の瞬間、「ああっ」と声を出した。

「同じフロアーにいるから、顔はわかるかな、理子ちゃん。船木健人君よ」

「うんうん、わかります」

「よろしく願います。僕、初めて市電に乗りました」

「はい。よろしく願います」

可愛い笑顔を向けて理子も会釈した。

二人が並ぶ姿を見ると、弟は幸せに暮らしているだろうかと思った。

健人の身長が高いことが分かった。この家で一番背の低いわたしは、せめて背筋をしゃんとしよう、考えている。

「キッチンや冷蔵庫、共用スペースは自由に使ってください。使った物は仕舞うこと。理子ちゃんと同じく、光熱費、ひと月五千円です」

押し入れから新しい布団を一組出した。寝具とタオル一式を空き部屋へ運ぶ。東向きの部屋は理子と同じ5畳半の洋室だ。本棚があり、父の趣味部屋になっていた。

ご飯に作り置きカレーとチーズをトッピングし、三人で食べる。ダイニングテーブルに三人が座ると、思いのほか狭く感じた。

翌朝、健人が洗面所を使っていた。洗面所を使うときはドアを閉める。ドアが閉まっていたら使

用中ということ。暗黙のルールは増えていく。

「おはようございます。久しぶりの布団は最高でした。ありがとうございます」

健人の笑顔に胸をなでおろす。余計なお世話をしているのではないかと、昨夜は寝付けなかった子育てをしたことのないわたしが、いきなり成人した娘と息子を持つことになった気分だ。

まさか浮かれてはいないだろうか。張り切りすぎてはいけない。尊重しあわなければいけない。そんなことを考えているのは自分だけなのかもしれないと思うほど、理子と健人は自由に暮らし始めた。

子どもってどんな感じなのだろうと思ったことはあった。姪たちを見てきてはいたが、遊びに来る感覚でしかなかったので、生活というものを経験していない。干渉しないと自分で決めたくせに、理子と健人がとても気になった。お腹は空いていないだろうか。今、お風呂を使いたいのではないだろうか。洗濯をしたいのではないだろうか。

彼らの手持ちの服は黒いものが多かった。理子は可愛い顔をしているのだから、もっとお洒落を乐しめばいいのにも思う。

「目立たないように生きています」と理子は笑った。

考えてみれば、わたしたちはどこか似ているのかもしれない。彼女の言葉に頷くわたしもまた、ひっそりと生きている。

キッチンに置いたタンブラーが三つになった。浄水器があるのだからと勧めてから、二人は会社

へ水筒を持っていくようになった。飲みものを買うことを節約できるだろう。

気が付けばゴミ出しは健人がしてくれていたし、理子は毎朝、フローリングシートをかけてくれた。

お弁当が欲しい日は冷蔵庫に貼ったカレンダーに○をつけることにした。理子はピンクマジック、健人はブルーだ。一食、三百円と決めてから二つの貯金箱を置いた。

今の会社に勤めるようになってから、わたしはおにぎりを買うことも、外食をすることもない。コロナのこともあるけれど、結局、手作りお弁当が一番美味しい。卵焼きとウインナー、ほうれん草の胡麻和え、鮭の三分の一を白米にのせただけのものだけど飽きない。

ところが、誰かに作る弁当には知恵と力が入ることを知った。カレンダーの印が増えていき、週末を除いて、三人分の弁当を作ることとなった。

それまで全く気にしていなかった彩りを考えるようになり、お弁当に欠かせない色の付いたおかずカップを買いはじめた。理子と健人は帰宅後、お弁当箱とタンブラーを洗う。夕食を一緒に取ることも多くなり、◎印も並ぶ。

二人の表情が豊かになったような気がして嬉しかったし、気も楽だった。わたしはそう思っているのだが、実際のところ二人は窮屈に感じているかもしれない。

「ありがとうございます」と言われるたびに、はっとする。頑張っていると感じさせないように過ごすことは難しい。

いつしか呼称が「理子ちゃん」「健人君」「佳美さん」になっていた。会社で顔を合わせるとはほとんどなかったから、ちょうどよい距離感だ。三人のグループラインを理子が作ってくれたことで、連絡も取りやすくなった。

「佳美家」のラインは日に一度は入ってきて、必ず休憩時間にチェックする。

〈日曜日、一緒に夕飯を食べましょう。リクエストありますか〉

〈鍋がいいです〉最初に健人が応えてくれるパターン。

〈わたしも鍋がいいです〉

簡単でいいけれど、二人は飽きもせずよく食べた。鍋レパートリーも尽きてくる。好評である白胡麻をたっぷり入れた豆乳鍋が二週続くこともある。

三人で食事をするときには、理子もキッチンに立ち、健人がテーブルセッティングをする。買い出しへ行くこともあり、カートを押す健人の後ろを理子と二人で歩く。駐車場周りの雪かきもしてくれる。

いつしかダイニングテーブルには籠に入った蜜柑が常に置かれるようになった。色が増えると温かく感じる。いいものだ。蜜柑を箱で買うのは何年ぶりだろうか。

若い二人は音楽をよく聴く。昭和の歌謡曲が部屋からこぼれてくると「昔の曲が流行っている」と教えてくれた。父の本棚から選んだ古い小説を健人が読んでいることもある。

「佳美ちゃん、最近どう」

毎朝、必ずラインでやり取りしている亮子との生存確認は「おはよう」のスタンプだけだけれど、深夜の電話は珍しい。

寂しいか、もしくはまあまあ幸せかのどちらかだ。お互い、本当に苦しいときに話ほしない。若い頃は都度、向き合い語り合ったけれど、三十を過ぎた頃からは事後報告が多くなった。

「まあまあ楽しくやっている。亮子ちゃんは」

「こちらは楽しくはないけれど、仕事の一段落報告。で、楽しい理由はなかに」

「派遣から来ている三十歳の女の子と、二十歳の男の子がうちで暮らしている」

「はああ。びっくり。大丈夫なの。素性わかっているの」

「よくは知らないけど、今のところ問題ない」

「なんかよくわからないから、今度行くわ」

その週末、早速、亮子が来た。

家に四人がいることが不思議だった。テーブルに皿が並べられ、これがホームパーティーというものかと思った。羽根つき餃子はきれいに焼けたし、オーブンで焼いた手羽先も塩加減がちょうどよかった。亮子が差し入れてくれたスパークリングワインの栓を抜くと心地よい音がした。健人は軽く口をつけた程度で、ジンジャーエールを飲んでいた。

さすが、自慢のわが友は状況判断やコミュニケーション力に長けている。初めての二人を前にして

偉ぶることなく、かといって大人のふりもしない。昔話をしながら、わたしの失敗談を伝えてくれて笑い声が交差する。

「佳美ちゃんは、つんつんしているでしょう」

そうだった。昔から亮子に言われていた。

「遠いところばかり見ていたら駄目だよ。ガード力は時と場合で使い分けなくちゃね」

意識はしているのだけどうまくいかない時が多い。

「いやいや逆です。健人君とも話しますが、佳美さんって天然要素がありますからね。くすつと笑っちゃう行動をするんです。んー、例えばね、この間、お弁当に焼いた小揚げが入っていたんですけど、中に何が入っていたと思いますか」

亮子はグラスを飲み干し考えている。

「卵サラダが入っていたの。外はカリッとしていて美味しかったけど、初めて食べました」
理子が笑う。

「そうそう。佳美さんの創作料理は最高だし、昨日の理子ちゃんのシチューも美味しくて僕が全部食べちゃった」

「はは。でもだめ。わたしは結婚に向いていないと思います」

「だけどねえ、理子ちゃん。好きになった相手によって自分が変わっていくこともあるんじゃないかな。わたしも結婚には向いていないと思うけど、パートナーは必要だって思うのよ。諦め

ていないわよ。愛情って大事よねえ」

鼻を膨らませて亮子がおどけた。

「僕はその愛情って何だろうって。よくわかんないです。思いやりとか、見えないから」

「あなたは十分、思いやりのある子よ」

健人を想いわたしは言った。

「そういうことって、学ぶものですか」

「確かに」

亮子と理子が声を揃えた。

「こうして誰かと話をしたり、恋をしたりした分、知らなかった感情が蓄積されるのよ。ねえ、佳美ちゃん」

「恋、ですか」

髪をくしゃくしゃと触る健人が幼く見える。

「子を産み、育ててもいけないけれど、二人と話していると、親の気持ちが少しだけわかるような気がするわ。この感情線上にそういったものがくっついてくる感じなのかな」

亮子の言葉にわたしは頷く。

帰宅が遅いと多少心配する。健人はまたネカフェに戻ってしまうのではないか。理子の旦那が押しかけてはこないだろうかと考えると苦しくなるのだ。

「そう、佳美さんってお母さんみたい」

曇りのない瞳を細めて理子がはにかむ。

「うん。お母さん、だね」

ぼつりと言った健人のその響きにうっとりとしそうになった。

喜ばせる言葉をこの子たちは知っていると捻くれた気持ちにはならない。むしろ、二人をぎゅっと抱きしめたいくらいだ。

「おばあちゃんじゃなくてよかったね、佳美ちゃん。そうね、あなたたち似ている。同じご飯食べていると似てくるのかしら」

月曜日のお弁当は、二人の好きな生姜たつぷりの塩唐揚げと、マヨネーズ入りの卵焼きにしよう。今夜、亮子が来てくれたことで、新しいスパイスが加わった。

大晦日になった。

同棲を始めた妹の家には行かないという理子と、母親の引越し先を知らない健人との年越しとなった。

久しぶりに蟹を買う。市場に勤めている同級生がトラバ足を届けてくれた。ついでに蛸も頼んだ。旨煮が鍋の中でコトコトと音を出している。黒豆を正月用の楊枝に刺しながら健人がつまみ食いをしてるのを理子が笑って見ている。前日からあく抜きをしていた牛蒡のきんぴらも美味しくで

きた。伊達巻はオープンに任せ、蕎麦つゆは鶏肉で炒めをし、薬味はネギだけ。年末の匂いが部屋に充満している。

おせち料理を前に、ビールを飲み、テレビを観る。旨煮の具材に栗を加え、三つ葉をのせた茶碗蒸しが出来上がり、雑煮用の汁も作り終えた。母が毎年していたことだった。

「大晦日って、ご馳走食べながら紅白観るんですね」

栗きんとんを口にして甘党の健人がこりと笑う。

「北海道は年末からおせち料理を食べますよね。そういう行事が本当に苦手でした。結婚して夫の実家に住むってことがよくなかった。ほんと、後悔しかないです」

「学んだのだからよしとしよう」

「僕は昨年、どうしていたかな。あ、カップ麺ですけど、蕎麦は食べました」

「いいじゃない。ちゃんと年越し蕎麦食べたのだから」

「佳美さんってほんとにポジティブですよね」

理子の両親はそれぞれ再婚している。故郷の函館には戻りたくないと言う。生まれ育った場所だけれど、行く先々で知り合いに会う確率が高くて気が滅入るらしい。

せめて、ここで暮らす日々は穏やかに過ごしてほしい。

「僕は多分、生まれちゃったって感じですからね。兄ちゃんもいつのまにかいなくなっていたし。中学の給食費は新聞配達で納めていました。あの人、母親ですけど、給食費を払うということを知

らなかったと思いますよ。ここ、笑っていいです。もう過ぎたことです。高校は給食じゃなかったから楽でした。お金がない日は無理に食べなくてもいいし。コンビニバイトのいいところは廃棄のお弁当をもらえることで、それで栄養摂っていました。遊ぶって、何をして遊ぶのかわかりません。ゲームの中の友達ならいますけど、リアルはいない」

健人と、自分の二十歳がまったく重ならなかった。

毎週ananの最終ページで励まされ、友人とドライブ途中でファストフード店に立ち寄れば、コーヒー一杯で何時間もお喋りを楽しんだ。ススキノで知り合った年齢幅は広く、男女問わず皆、優しくかった。そういえば、来年、ススキノ祭りはあるのだろうか。街を練り歩く花魁道中は美しく圧巻だから、理子と健人を誘ってみようか。老舗ジギスカン店で美味しいラム肉も食べてもらいたい。

何かをしたい、というこの気持ち。

好きな男ができると実際には何もしていないのだけれど、何かできることはないかなと考える気持ちとは違う。代償を求めてしまうからだろうか。二人にはもちろん、求めているものはない。あとすれば、彼らの体も心も健康でいてほしいことだけだ。

単調な生活をしてきたわたしは、Cメロが付くほど大きく変わった。Cメロという言葉も、二人からの受け売りだけれど、学ばせてもらったし、食事にも気を付けるようになった。

何より、わたし自身、生活を含めて色が増えた。

この子たちがここを出ていく日を考えないようにもしてきた。その日が来たとしても、いつでもごはんを食べにきてねと笑顔で送り出そうとも決めていた。

また独りになった。

誰かが居る、暮らしていたということはこういうことなのだ。

かりそめだったけれど楽しかった。おそらく、これまで生きてきた中で一番充実していたかもしれない。今頃何をしているのか、苦しんでいないか、ご飯は食べているか、穏やかでいるだろうか、と毎日思う。

離婚が成立した理子と、無事に部屋を借りられた健人は同じ日に出て行った。

もしかしたらひよっこり帰ってくるかもしれないと考えて、そんなはずはないと打ち消した。働いていれば生きていけるし、外には興味の湧く楽しいことがたくさん待っているはずだ。

ケースに二本の鍵が仕舞われた。

めくられたカレンダーに印がないことに、胸が締め付けられる。

誰かを案じ健やかでいてほしいと願うことや、守りたいものができたこの気持ちを母性と呼ぶのなら、いつそ知らない方がよかったのか。それは、こんなにも寂しいものなのか。

亮子と四人で雛祭りパーティーの約束はしているけれど、一緒に節分を過ぎたかっと思ふ。恵方巻を食べに来たらいいのにと欲が出てくる。

ラインが鳴ると飛びつく。何か困ったことがあったのかと、〈佳美家〉のグループラインをタップする。

〈佳美さん、健人くん 今夜は満月ですよ〜〉

〈おーほんとだ きれいです〉

わたしはベランダの外へ出て月を探した。南東の空に大きなオレンジが浮かんでいる。

〈佳美さん知っていました？ 金木犀って蜜柑色なんだから、あの月と同じ色なのかなあ 今年は

金木犀を探しましょう（笑）

〈僕も連れて行ってください〉

そうか。まだ見ぬ花はあの色なのか。三人で探す花を想像したわたしは、先ほど感じた寂しさから離れ、月を眺めていた。

S P O T

鮎村 尚

表札の上には、丸いペンダントライトが、各部屋に備え付けられている。

エレベーターを八階で降り、廊下を歩いて十二番目にあるオレンジ色の光が、白崎理央と母親の部屋だ。

重いドアを開けると、大理石模様のタイルに、母のパールホワイトの草履が並んでいた。トリートメントオイルの匂いが、狭い玄関にまで満ちている。理央はブーツを脱ぎながら、ドライヤーの音に負けないよう、叫んだ。

「ただいま」

「おかえりなさい。早かったわね」

風呂から上がった母が、引き戸を開け、眉のない顔を覗かせた。母はタオールドドライをした髪にオイルを塗り、プラズマイオンのドライヤーをかけていた。

ルビー色のボトルが、洗面台の美容液の隣に並んでいる。

エレガントな曲線を見せる細身のボトルには、トリートメントオイルが入っていた。ボルドー色のキャップの中央に、ブランドロゴが銀色に浮かぶ。

トリートメントオイルは、マグノリアの香りだ。

母は美容室で買ったトリートメントを、十九歳の理央には使わせてくれなかった。カラーを入れたり、パーマを掛けたことのない、ストレートの黒髪には、まだ必要がないらしい。

母は離婚後、ススキノで小料理屋を経営している。奥の台所には、巾着やきんぴらごぼう、鶏の唐揚げが、皿とタッパーに盛り立てていた。

築三十年の十階建てのマンションに、札幌市電の警笛が聞こえてきた。理央は手を洗い、小さめの唐揚げを一つ頬張った。カーテンのタッセルを外すと、隣接するマンションとの隙間から、雪に彩られた藻岩山の山肌が見えた。舞い落ちる雪は、夕焼けに照らされ、きらきらと光っていた。

理央は大学で社会福祉学を専攻している。

高校二年から進学クラスで、受験に向けての日々を過ごしてきた。布製の手作りマスクを付けたまま、母と合格発表を見に行き、ひかえめに抱き合った。これから大学生活を楽しもうと思っただけなのに、四月七日、新型コロナウイルス拡大防止の第一回目の緊急事態宣言が発令された。

入学式用に買ったスーツは袖を通すことなく、ヒールも箱から出していない。オリエンテーションと身体検査以外は、ほとんどがオンライン授業で、しかも大学や講師の都合で、一学期は休講が多かった。

空き時間を利用し、アルバイトを始めようかと求人サイトに登録してみたものの、外出自粛や飲食店の時間制限で、求人数が極端に少なかった。一つの求人に応募者が殺到し、受信箱には不採用通知がたまった。ようやく、秋からクレープ屋でアルバイトを始めた。

コロナ禍でゼミの忘年会も中止となり、正月明けから、早番でアルバイトを入れた。夜は部屋で心理学のレポートを書いた。休講の穴埋めをするため、冬休み期間中もゼミや共通科目のオンライン授業が入った。明日も午前九時から、ゼミの報告会がリモートで開催される。

ソファアに座り、後ろに結んだ長い髪をほどいたら、クレープ生地の甘い香りが、あたり一面に広がった。

蓮から、スマホにラインが入っていた。蓮は高校の同級生で、卒業前の緊急事態宣言の時に付き合い始めた。二人でふざけて「コロナツプル」と笑っていた。同じ大学の経済学部に通い、コンビニでアルバイトをしていた。

ドライヤーの音が止まり、化粧水を塗り込む音が、リズムカルに近付いてきた。

「成人式の着物、用意しておいたよ」

「ありがとう」

札幌中心部も人の流れが戻りつつあった。けれども、ススキノの飲食店ではクラスタが発生し、客足もめっきりと減り、営業時間も短縮を余儀なくされた。

母の店の常連客は、肩身を狭くしながら、足繁く通ってくれていたようだ。カウンターでビールを飲みながら物菓を二、三品つまみ、日ハムの試合を観て、小一時間で帰るらしかった。

母はいつも店では着物を着ていた。肩まである髪を低い位置でまとめ、慣れた手付きで帯を結ぶ。着物姿だと、実年齢の四十六歳よりも上に見えるが、髪を下ろしデニムをはくと、ぐっと若返る。

休みの日に母とデパートに出掛けると、姉妹だと間違われることが、理央には自慢だった。目と口は、母に似ていると言われた。鼻だけは、古い写真でしか知らない父に似たのだろう。今は口も鼻も、マスクに覆われている。

母は週に一度、ススキノ交差点に面したテナントビルにある美容室で、トリートメントとセットを頼んでいた。担当は三十代後半の鉄雄という美容師で、東京のサロンで十年働き、五年前に札幌に帰ってきた。

理央も月に一度、鉄雄の店で髪を切る。鏡の中の鉄雄は、ゆるめにパーマを掛け、顎と口に髭を薄く残していた。去年の桜の時期に、成人式の着付けとセットを予約した。

振袖は二十七年前に母が着た、青地に御所車や桜、牡丹、菊の古典柄だ。二年前に亡くなった祖父が、一人娘のために用意したものだ。その振袖を理央は受け継いだ。

「鉄雄くん、予約空いていて良かったね」

「絶対、セツトは鉄雄さんをお願いしたかったんだ」

鉄雄の店は、オーナーからスペースを借りる面貸し店舗だ。八階の店は、ガラス張りで自然光が入り、フリーの美容師は、自分のイスに名前や屋号を記していた。「S P O T」と書かれた鉄雄のイスに座ると、暮れ行く空の下、ススキノのネオンと観覧車の光の輪が点滅した。鉄雄の話聞きながら、駅前通りを走る札幌市電と、その間を行き交う人の流れを見るのが、高校時代から好きだ。「式の前日までに着物と小物、お店に預けてね」

「小物、一緒に確認してくれる？」

二個目の唐揚げに手を伸ばすと、目ざとくつまみ食いを見つけた母から、軽く頭を小突かれた。気の抜けたラインの受信音のあとで、スマホの画面に文字がべたりと張り付いた。

「明日の映画、何時？」

蓮には、先週のうちに上映時間と待ち合わせ場所をラインで送っていた。日付をさかのぼって確認すれば良いことだろう。

明日、バイトの前にゼミの発表がある。二十五分割の画面には、楠木教授と、二十四名の学生の顔が映る。理央の年代はオンライン授業や、ネット飲みが生活の一部となっていた。大半が背景をネット上のフリー素材や、デイズニードの写真にしたり、木目調のクローゼットにしている。女子は朝の九時にも拘らず、眉を整え、ナチュラルメイクで笑っていた。蓮も共通科目の英語で、同じオンライン授業を受講していた。

「六時に大丸のオブジェの前」

「やっぱり夕飯、スープカレーよりもラーメン食べたい。痺れ辛い系」

またラーメンか。能天気な文字を無視するように、液晶を傷付けない程度の強さで、スマホを乱暴に伏せた。

理央の対角線上に、その人物はいた。

ZOOMの画面では、女子学生が胆振東部地震の被害をベースにした、地域の取り組み方のレポートを発表していた。マイクの性能だろうか。理央は聞きづらい籠もった声に、むず痒さを感じた。まるで地下鉄の中の、マスク越しの会話みたいだ。メールで送られたエクセルデータとワードの文書に目を通していた時、パソコンの画面から、女子学生とは違う声が飛び込んできた。

「施設職員やボランティアの方のアンケートはわかりやすいですが、今後の課題が明記されていませんよね」

H・TのIDを持つ学生だ。

このゼミの他に、社会福祉学入門、憲法、英語のオンライン上にいた。二十五分割のブロックにいるH・Tは、いつも講義に真剣に耳を傾け、講師や学生の発表に質問を投げかけていた。

髪型はゆるめにパーマをかけたショートボブで、穏やかな印象の顔は血色も良い。化粧のテクニクなのか、それとも土台が良いのか、きつちりとした目元の目力は、画面を通して強かった。

なによりも、H・Tの性別が、不明だった。喉仏を確かめようにも、いつも薄手のタートルネックを着ていた。タートルネックの下は、スカートなのか、それともパンツなのか。オンラインでは、性別を確かめることはできなかった。一度、ZOOMのピン機能で、H・Tの画面を大きく映し出してみた。髭剃りあとを確認していた時、教授から質問をされ、声が裏返ってしまった。

H・Tの声をパソコンで初めて聞いた時、男の子なんだと、妙に納得したのを覚えている。まるで難解のパズルを解けた爽快感だった。英語の授業で、同じ列にいるH・Tと蓮の顔を、つい見比べてしまった。

H・Tだけではなく、大学の同級生は、オリエンテーション以外は、オンライン上でしか会えなかった。楽しみにしていたサークル紹介も中止となり、結局、どこにも入部しなかった。高校時代からのライングループは、札幌市の感染者数に怯えながら、「早く会いたいね」のコメントのあとに、決意表明のようにスタンプが連打される。

教授が、今日発表があったレポートの感想を述べ、時間通りにゼミは終了した。H・Tの画面も、彼の存在がなかったかのように、黒く塗り潰されていた。理央は退出していく学生の画面を眺めながら、ふと小学校のスクールバスから見た、創成川を思い出した。同じクラスの子が、どんどん先に降りていく。川面にはススキノのネオンがにじんでいた。ビル群がまるで、一枚の影絵みたいだった。

紐や補正用タオルの数を何度も確認し、スーツケースを転がしながら、コンビニの横を通り過ぎた。午後三時を過ぎたスキノのテナントビルは、人影もまばらだ。理央はエレベーターの8のボタンを押した。

新型コロナウイルスの影響で、休業しているスナックが並ぶ突き当たりに、店名が入っていないガラス戸がある。ドア越しに、パステルカラーのロットを整理している鉄雄を確認した。

店内にはジャズが流れ、シャンプールの匂いと、珈琲の香りが満ちていた。大きな窓ガラスの向こうで、昼間は活気のない居酒屋やホストクラブの看板が、時間を持って余っていた。

理央に気付いた鉄雄は、共有で使っているソファアを勧めてくれた。鉄雄の背中越しに、ビール会社の広告の泡が大きく膨らんでいた。

シャツにワークパンツを合わせたシンプルなスタイルが、手足の長さを強調している。天井のレール用スポットライトが、鉄雄のブーツの爪先を照らす。磨かれた皮の表面に光沢が出ていた。

「いよいよ理央ちゃんも大人の仲間入りだね」
「まだまだ子どもです」

鉄雄の腰には、数種類のハサミとコームを収納するシザーケースが吊り下げられていた。がっしりとした体格とは対照的に、繊細な手さばきでハサミを使い、シャンプーもトリートメントをするのも丁寧だ。

高校時代、制服のまま傷んだ毛先をカットしてもらい、グレープフルーツの香りのするトリート

メントを、大きな手で塗り込んでもらった。

スタイリング中に聞かされる、鉄雄の話は面白かった。東京での生活や、美容技術選手権でのエピソード、趣味の料理や釣り。店名の「SPORT」も釣り用語で、釣り場を意味するそうだ。

特に美容学校時代の話は興味をそそられた。鉄雄がカット用のマネキンを教室に置き忘れた時、額に「肉」と書かれ、髪の毛を丸坊主にされた。犯人は結局分からなかったが、同じクラスの女子学生だと、まことしやかに囁かれたらしい。

「肉ってひどくない？ ウケる」

笑い転げる理央の肩を、鉄雄はそつと後ろから抑えた。

「理央ちゃん、カットしているから、動かないで」

肉事件から、鉄雄はどんなに重くても、マネキンやシザーに限らず、コームやロッド、カラー用の刷毛などを、自宅へ持ち帰るようになったと聞く。専門学校時代や、サロンに勤務してからも、貴重品の盗難や道具のイタズラは、忘れた頃に起きた。

「コンテストの時も、仕上げにスプレーをしようとしたら、中が空になっていた」

「それで、どうしたの？」

ドライヤーをかけながら、ニヤリと笑う目は、やんちゃな少年のものだった。

「隣の奴に貸して！ って叫んだ。返事を聞く前に、手早くシューツ！ 終わりました、って、手をあげた」

「それで、優勝」

「うん。ちなみに隣の奴は準優勝。ちゃんと道具を確認しろって、喫煙所で蹴られた」

「鉄雄さん、最高だね」

鏡の中の艶やかな髪は、指通りも気持ち良かった。その日、家に帰った理央は出勤前の母に何気なく問い掛けた。

「鉄雄さん、格好良いよね。結婚しているのかな？」

「結婚はしていないよ」

「彼女さんいるんだ。どんな人なんだろう」

理央はニキビ面で廊下を走る男子と、コンテストで優勝した鉄雄を比べていた。ラインで告白してくる男子もいたが、鉄雄は物腰の柔らかさの中に、仕事への圧倒的な自信と、経験値を重ねた落ち着き、スマートな色気があった。

「鉄雄くん、男性のパートナーがいるのよ。第三観光ビルでお店をやっているの」

「えっ、嘘でしょう」

「鉄雄くんの店でたまに会うの。着物が似合う素敵なお人よ」

喉の奥が重くつかえた。それから理央は、小さな痛みを忘れるために、ひたすら受験勉強に没頭した。

高校三年の冬休み明け、いきなり蓮に告白された。

「受験終わったら、付き合ってくれる？」

同じ進学クラスで、サツカー部でのポジションはDFだった。伸ばし始めた前髪の下には、人懐っこい笑顔があり、ニキビのあとも、受験が終わる頃には消えていた。同じ大学に合格するという共通の目標が、その先にある恋愛へと導いてくれたことになった。

大学のオリエンテーションで、LGBTQのセミナーがあった。講義でもジェンダー論を受講している。性の多様性を頭ではわかっているけど、それは漫画やドラマの世界だと思っていた。理央の中で、鉄雄のパートナーの輪郭が、未だに想像できなかった。

それゆえ、H・Tとオンライン授業で一緒になった時、性別を超えた魅力と、授業態度に親しみを持った。コロナが落ち着いたら、対面授業で会うことができるのだろうか。学食のテーブルで、隣の席に座っている可能性だってあるはずだ。

鉄雄のパートナーはどうだろう。あれからも店に通い続けているが、パートナーとは一度も出くわしたことがなかった。

今日も成人式の着物を預け、当日のセットの内容を相談しながら、台所で包丁を握り、海岸でリールを回す鉄雄の指先を想像していた。背後には、着物姿の男が立っている。顔には、着物に不釣り合いな、白い不織布マスクがある。その上にあるのは、マネキンの無表情な瞳だった。

成人式三日前に、うなじと襟足をエステサロンでシェービングしてもらった。ゆったりと巻いた

マフラーの下にある、うなじの感触に慣れなかった。産毛や古い角質が取れた肌は、一時的に毛穴から皮脂が分泌されたり、赤みが生じたりするらしい。マフラーに顔を埋め、予約したネイルサロンの扉を肘で押した。

バイト先のクレープ屋はマニキュアは禁止で、長い髪も制服の白いベレー帽の中にまとめなければならぬ。クレープの作り方と同様、身だしなみのマニユアルも厳しかった。先月入った専門学生は、店長からマニキュアを落とせと言われ、一日でバイトを辞めた。

高校時代からの友人は、ネイルサロンに通い、インスタに画像をアップした。先端にピンク系のドライフラワーが埋め込まれたネイルは、洋服にも着物にも似合うだろう。

初めて訪れたネイルサロンは、パーティションで区切られ、ネイルストと理央の間には、アクリル板があった。ネイルストはレースのマスクを付け、完璧なアイメイクはまつ毛の一本一本まで、崩れを知らなかった。まるでゲームの中の戦闘用の武器みたいだ。

ドライフラワーとラメを入れてもらいながら、二十五歳のネイルストとKPOPや高校時代の思い出、彼氏の話をした。ストーンをネイルに埋め込まれている時、理央は同じ並びの席を見渡した。ゆったりとした一人掛けのソファーには、お揃いのチェックの膝掛けが、ソファーとセットのように横一列に並んでいた。客の年齢層は理央と同年代から四十代後半と幅広かった。

一番奥の席に、黒いスーツ姿の男がいた。スーツは細身のデザインで、光沢のある素材を使い、会社員が着ている定番の物とは明らかに違って見えた。髪は動きを入れるようにカットし、シルバ

ー寄りのグレー系で染めている。

出勤前のホストだ。母の店があるビルの真向かいには、関西から進出してきたホストクラブが入っていた。数回、声を掛けられたことはあるけれど、理央にとっては、ホストは宗教の勧誘と同じでしかなかった。ホストはお金を落としてくれる客のために、爪を整えているのか。それとも、自分を飾るためなのか。

ネイリストは理央の視線に気づき、抑えめの声で囁いた。

「最近はお客様も増えているんですよ。夜職以外の方も来ています。商談中に手や爪が気になるんですって」

「私もクレープ屋でバイトしてなかったら、ネイルするのに」

H・Tの爪も、銀髪のホストのようにネイルサロンで整えているのだろうか。ゼミの発表も終わり、大学の授業は一月末まで休みだ。成人式以外の予定は、バイトと蓮とのデートしか入ってなかった。そろそろ友だちや、他の人間とも対面で交流したい。

最後に、リンパの流れを良くするために、手首から指先にかけてハンドマッサージをもらった。身体の内側からじんわりと温かくなってきた。

「ネイルの写真、アップしてもいいですか？ 理央さんの指先、キレイだから」

「ありがとうございます。私もインスタにあげますね」

オンライン授業でコメントを打つ指先からは、言葉が生まれる。ホストクラブでシャンパンタワー

ーに拍手をする指先からは、うたかたの夢が生まれるのだろうか。

数枚の写真を撮り終え、施術は終わった。ネイリストは伝票を確認し、カラコンを入れている瞳を最大限に開いて、目尻だけで笑った。

「これからデートですね。うらやましいな」

彼氏と別れたネイリストは、最近韓国語を習い始めたという。コロナ感染が収束したら、K P O Pのライブに行くそうだ。

コロナが感染拡大する前は、高校時代の仲良しグループで、夏休みに沖繩へ行こうと計画を練っていた。思い切って買ったビキニも、シュノーケリングや沖繩料理、美ら海水族館も、白紙となった。

受験勉強から解放されてからは、マスクや消毒液の確保に奮闘し、シャツターが降りた地下街の店舗を見る度に、気持ちも塞いでいった。母も数ヶ月は店を閉めていた。

人の動きが止まると共に、自分の中の欲求が薄らいでいく感覚を、身体の中に抱えていた。高校時代は、お腹の下に宿った熱の処理を、持て余していたのに……。

待ち合わせ場所の地下鉄入り口には、蓮と同じような黒いコートとデニムをはいた若い男たちが立っていた。

蓮からは、コンビニのフライヤーの臭いがした。バイト仲間が腹痛で急遽休み、昼から夕方まで、カウンターの中で唐揚げやコロツケを揚げていたそうだ。おでんの仕込み担当の日には、和風だし

の臭いがした。

蓮がめずらしくラーメンを諦めてくれた。スープカレー屋のカウンターで、二人並んで骨付きのチキンを黙々とほぐした。滅多に食卓で蟹は出ないけれど、きつと蟹を食べているカップルも、こんな風に無言なのだろう。

辛いスープをライムの輪切りが入った水で流し込み、汗を拭った。奥のテーブルでは、恰幅の良い男が、ピッチャーに入れた水をビールのように飲み干していた。

チキンの骨が一本、二本と皿に当たった。雑に骨を捨てる音が、カウンターの壁に反響した。蓮は時々、大雑把なところがあった。理央は小さい頃から家に異性がいないため、蓮の大胆で粗雑な行動に、時々戸惑う。

先に食べ終えた蓮は、コンビニの常連客の話をし始めた。

「毎朝、ストロング缶を買い込んで、外でゲームをやっているんだぜ。完全にアル中だよ」

コンビニ前の車止めに座り、ストロング缶を飲みながら、iQOSを吸っている風変わりな客。地主の息子と噂をされているらしいが、コンビニには風変わりな常連客が多いらしい。

「午前中からワンカップを何本も買っているオヤジもいるし」

「クレープ屋にも態度の悪いお客さんはいるよ」

カウンターに、クレープ代を投げて寄こす女子高生はいるし、夜には酔っ払いも来る。

一度、鉄雄がチョコバナナやイチゴクリーム、自分用のツナマヨネーズを数種類、テイクアウト

してくれた。クレープ生地を焼き台に垂らし、木のトンポでいつも通りに伸ばした。カウンター越しに並ぶ鉄雄の視線を意識し、茶色く焦げてしまった。失敗した生地をさりげなく横にずらし、理央は再び生地を鉄板に流した。店の差し入れと言っていたけれど、美容室なのか、それともパートナーの店なのか……。

スープカレーを食べ終え、ラッシーのストローをくわえる。口の中に甘みが広がり、スパイスを洗い流してくれた。蓮が自分のシャツの脇の下に、鼻を寄せた。

「今日、フライヤー係だったから、俺、臭うだろう」

「もう慣れたよ」

スマホで時間を確認し、肘で意思疎通を試みってきた。

「シャワー浴びたい。フリータイム、まだ間に合うし」

ラブホテルのフリータイムは、平日は二十四時までだ。休憩時間二時間の料金で、最大十二時間過ごすことができる。お互い実家暮らしの二人は、ラブホテルしかセックスをする場所がなかった。

「明日、バイトなんだよ」

「何時から？ 早番じゃないよね」

今日、初めて襟足に剃刀を当てたため、赤みが発生するかもしれないと、エステシャンに言われた。明日からの二日間は、肌の状態も体調も完璧に過ごしたい。

だから蓮は夕食をスープカレーにしたのだろうか。そこまで勘ぐってしまった。

「ごめん。ちょっと体調悪くて」

セックスをする気分ではないと、はつきり言えなかった。バイト代が出る二十五日過ぎは、決まって蓮から誘いが入った。コロナ禍の前は、ホテルのシステムやジェットバス付きの風呂に二人ではしゃいでいた。お互い初めての相手で、好奇心や探究心が先走りしていた。

ホテルの受付や部屋に消毒液が置かれるようになってから、誰が触ったか分からない、ドアの取手やテレビのリモコン、照明を調整するボタンに触れるのを躊躇うようになった。潔癖症ではなかったはずなのに、理央の手を導く蓮の指先に、集中できなくなった。

「そっか。成人式、大丈夫なのか？」

隣に置いたマフラーをお腹に掛けてくれた。どうやら蓮は生理か、生理前のPMSの体調の悪さだと思っているようだ。理央の中で生まれた小さな罪悪感と、入り口からの冷たい風が、ショートブーツの隙間に入り込んだ。

「成人式が終わったらね」

「二人でお祝いしような」

コロナのせいで空白になってしまったのか。さすがに高校時代のグループラインで、性の悩みを投げ掛けることなどできない。リモート授業の学生たちはどうなんだろうか。蓮と同じ列にいるH・Tの恋愛対象は男なのか女なのか。

「あのさ、英語の講義で、蓮の真上にいる男の子わかる？ 綺麗な顔立ちで最初は女の子に見えた

んだ」

「そんな奴いたか？ 俺、理央しか見ていないから」

「えっ？ 意味わかんない」

ガサツな性格なのに、忘れた頃に付き合い始めのときめきを思い出させてくれる。一緒にいるのに、自分は鉄雄やH・Tのことを考えている。

これを、「不実」と呼ぶのだろうか。

雪煙が凍結した車道を舐めるように舞う。

祝日の札幌市内は車もまばらで、内回りの電車が、ススキノ方面から近付いてきた。

午前八時半、母の運転するボルドー色のセダンで、鉄雄の店まで送ってもらった。母はそのまま祖母の住む江別市に車を走らせた。今年の成人式はコロナウィルスの影響で直前に中止となったため、写真だけは撮ることにした。写真館の予約は、午前十一時だ。蓮が十時半にビルの一階まで迎えに来てくれる。

美容室の着付けスペースには、理央の振袖の横に、鮮やかな四季の花々が美しい、赤色の振袖が掛けられていた。着付けは、鉄雄の知り合いの女性スタッフにお願いした。

ケープをかけた理央は、いつものイスに座った。目の前のテナントビルの窓に朝日が反射して眩しかった。鉄雄は黒いマスクに、同系色の中折れハットを被っていた。白いシャツにダークグレー

のパンツスタイルは洗練されている。

この日のために髪を伸ばし続けた。鉄雄が太いカーラーで巻いた髪を、サイドの位置で編み込んでいく。トップに膨らみを持たせ、後ろの髪は流れを見せるために、ウェーブを残した。

毛先を揃え、ドライヤーで髪を乾かす普段の施術よりも、ヘアセットは髪に触れる頻度が多い。鏡と理央の顔を何度も交互に覗き込む鉄雄の視線に、呼吸が苦しくなってきた。天井から降り注ぐライトにまばたきをした。

鉄雄のパートナーは、ススキノでゲイバーを経営しているという。毎回鉄雄にセットをしてもらっているのだろうか。鉄雄は、理央にはパートナーの話は一切しなかった。理央もどう話を振れば良いのか、わからなかった。

マスクの中の頬に朱が走った時、ヘアースプレーの霧が頭上で舞った。正面から見える位置に、桜とダリヤの髪飾りが咲いた。鉄雄が金色の組紐の結び目に、そっと手を添えた。

「はい、終了。理央ちゃん、着付けスペースに移動して」

衝立で仕切られた空間で、理央は足袋を履く段階から、もたついていた。数本の紐を肩に掛けた着付け担当者は、理央が新品の肌襦袢に袖を通したのを合図に、補正用のタオルを細い腰に巻いた。

青い振袖は身体に馴染み、上前の御所車の周りには椿や菊が流水に浮かんでいた。長い袂には桜吹雪が舞い、衿は金糸が入った伊達衿だ。帯は斜めに羽を作る立て矢結びで、帯揚げは空気を含むようにふんわりと結ぶ。最後に鮮やかな刺繍が入った帯締めを、キュッとバストラインの下で結ん

だ。

次の客の用意をしている鉄雄が、頬を紅潮させた理央を見るなり、目尻を下げた。

「着物も似合うね。いつもより大人っぽいよ」

「ありがとうございます」

母から譲り受けた振袖で、この日を迎えられたことに感謝した。鉄雄がタブレットで理央を撮影した。着物の全体の柄を見せる立ち姿や、背中で羽ばたく蝶々、斜め後ろから撮ったアップスタイル。理央は自分の表情がどんどん華やいでいくのを、襟足の熱さで感じた。

スーツ姿の蓮が、コンビニの前で歓声をあげた。

「やばい、めちゃくちゃ可愛い」

蓮はすかさずスマホで写真を撮り始めた。大学のオンライン授業では、寝癖が付いていた蓮も、髪を整え、入学式用に用意したスーツを着ると、いつもより頼もしく見える。

二人の横を、休日にはめずらしい会社員風の男がコンビニに入っていた。理央は足袋が汚れないよう、足元を気にした。足袋の硬さに慣れず、草履の前坪が窮屈に感じられる。

動画に切り替えた蓮をよそに、時間を確認しようとハンドバッグを開いた。スマホには、母から「写真館に着いたよ」とラインが入っていた。

タクシー乗り場に、数台が客待ちをしていた。

「蓮、行こう。お母さん、もう着いているよ」

蓮はインスタを編集していたが、理央は雪のない歩道に足を一步踏み出した。歩き方がおぼつかない理央の横を、コンビニから出た客が、舌打ちをしながら追い越していった。クレープ屋でも、待たされて舌打ちをする客がいた。嫌な記憶がうなじに走った。

白いシヨールを掛け直した時、インスタをアップした蓮が、鼻先を上に向けた。

「臭くないか？ 焦げた匂いがする」

空車のランプが消えたタクシーに気を取られ、足元から漂う臭いに反応が遅れた。

「なんの臭い？」

「理央、袖から煙が出ている！」

右袖をたくし上げると、内側から細い煙があがっていた。咄嗟の出来事に、理央は帯と腰紐のきつさを忘れた。火照っていた皮膚に、剃刀を当てられた時と同じ緊張が走る。

目の前で蓮の手が動き、我に返った。

「袖にタバコを入れられたんだよ。ふざけんな」

蓮が躊躇なく袖に手を入れた。理央は大きく前のめりになり、危うく転びそうになった。煙は薄いピンク色の長襦袢の外側から漏れている。嗅ぎ慣れていないタバコの臭いに、むせ返った。

「誰がタバコなんて入れたの」

「嫌がらせだよ」

蓮が袖を叩くと、半分まで灰になったタバコが、コンビニ前のフロアーマットに落ちた。茶色く

燃えているタバコの先に、しばし言葉を失った。

見知らぬ人間からの悪意に、理央は怒りの感情をどこかに置き忘れてしまった。

涙がこぼれた。袖を広げてみると、追いつきをかけるように、目の前にタバコで焦げた小さな穴があった。

「ひどい」

「大丈夫だよ。よくよく見ないと分からないし」

蓮が言っていることは確かだ。焦げ跡は、流水に乗って桜が舞っている柄にできた。他人は気が付かないだろう。けれども、理央には母から譲り受けた振袖に嫌がらせをされたことが許せなかった。

自動ドアが開いた。グレーのチェスターコートに、スキニーパンツを合わせた若い男が、すすり泣いている理央を見て、足を止めた。

「どうされました？」

「彼女の着物に、タバコを入れられたんです。上の美容室で着付けをしてもらったばかりなのに」
「着付けて、もしかして鉄雄さんの店ですか？」

理央はとめどなく流れる涙のぬるさを、一瞬で忘れた。目の前に、いつもパソコンの画面にいるH・Tが、立っていたのだ。

崩れたアイシャドウが指先を汚した。つけまつ毛が取れかかった理央は、信じ難いことに、H・

Tに畳み掛けるように話していた。

「北都大学の福祉学科の方ですよね？ 私、楠木先生のゼミを専攻しています」

「同級生ですね。それよりも、僕もこれから鉄雄さんの店に行くんです。メイクも直さないとダメだから、まずは上に行きましよう」

蓮だけが首を傾げていたが、言われるがまま、エレベーターに乗り込んだ。狭い箱の中に、リモート授業で会っていた三人が揃った。理央は混乱と緊張で、胃がひっくり返りそうになった。

「立花光と申します。リモートでいつも会っていたんですね」

「白崎理央です。隣は……」

「経済学部の葦原蓮です。理央とは高校時代からの付き合いです」

蓮の紹介はそのまま本人に持っていかれた。立花は瞬時に蓮の立ち位置を察したようだ。つけまつ毛の先を気にする振りをしながら、立花の顔を盗み見た。パソコンの画面よりも、小顔で肌のきめも細やかだ。うっすらと化粧をしているが、同年代の女子のような過度なアイメイクはしていない。肩まである髪も、手入れが行き届いている。

エレベーターが八階で止まった。鉄雄は理央の顔を見るなり、ケーブをワゴンに置いた。

「理央ちゃん、どうしたの、その顔？」

蓮と立花が、手短に状況を伝えた。

「まずはメイクを直そう。座って」

再びイスに座った。鏡越しに鉄雄を見るなり、徐々に気持ちが悪くなり、周りをみる余裕ができた。立花が着付けスペースにいる人間と話をしていた。蓮は理央の母親に連絡を取ってくれた。

鉄雄がコットンと綿棒でメイクの汚れを取り始めた時、奥から三十代後半らしき痩せ型の男が現れた。

「はじめまして、矢島と言います。白崎さんのお嬢さんですね」

鉄雄のパートナーだと直感した。矢島は上質そうなニットに、ウールのパンツをはいていた。髪を後ろで束ね、マスクの上から見える目は、切れ長のすっきりとした一重瞼だ。きっと和服が似合うだろう。ほのかにオリエンタル系の香りが漂ってきた。

「矢島さんはバーのママで、理央ちゃんのお母さんとは、ここでたまに会うんだ。二人とも俺のお客さんだから」

鉄雄が適度な距離を保って、矢島の横に立った。客と紹介した口振りも、数センチの身長差も、なにか特別な空気を感ぜさせた。

「着物、拝見してもいいですか？」

矢島は焦げた袖と周りの柄を確認した。母と祖母は写真館で待っている。理央は急に二人のことを思い出し、心細くなってきた。

「応急処置はしますが、すぐにお直しに出して下さい」

矢島から頼まれたのだろう。立花が奥から畳紙を抱えてきた。もしかやこれから、着付けをし直す

つもりなのだろう。蓮も周りの人間を見回している。

矢島が畳紙の紐を解き、膝の上で着物を広げた。淡い藤色の振袖には、袖と上前に桜と藤が舞っていた。矢島は袖を持ち上げ、黒い糸切り鋏で躊躇なく桜の花びらを一枚切り落とした。

理央は短い悲鳴をあげた。

「大丈夫。この振袖、訪問着用に仕立て直しをする予定なので」

「理央ちゃん、メイク直すからもう動かないで。その君、十分後にタクシー呼んで」

蓮が鉄雄に命ぜられるまま、タクシーを予約した。矢島は針に細い糸を通して、慎重に桜の花びらを縫い付け始めた。

鉄雄は化粧パレットからナチュラルな色味のアイシャドウを選び、アイラインを強めに引いた。新しいつけまつ毛をケースから取り出し、メイクが仕上がっていく過程を後ろで真剣に見つめる立花に、視線を向けた。

「立花くんも理央ちゃんが終わったら、メイクをするから」

「はい、よろしく願います」

鏡の中の立花が、困ったように笑っているのが、マスク越しでもわかった。もしかして、立花も振袖を着るのだろうか。蓮のように、濃紺のスーツを着るイメージはない。だからといって、立花に真意を確かめるのは、不躰な気がした。

「成人式の記念に、僕も着物で写真を撮るんです」

胸のつかえが取れた。その場にいる人間の中で、蓮だけが混乱しているようだった。

隣のワゴンには、赤いガーベラの髪飾りと、つまみ細工の小花が、ウィッグと一緒に用意されていた。簪の銀色のビラがきらきらと光っている。着付け室の隣に掛けられた、大輪の花が咲いた赤い振袖に似合うだろう。

「もしかして、私の隣に掛かっていた赤い着物ですか？」

「この子の振袖は、レンタルなんだけどね」

矢島が下を向いたまま、静かに呟いた。立花は蓮の視線をしきりに気にしていたようだが、矢島の一言で緩んだ。

「バイト代、レンタル料でなくなりました」

立花は矢島の店でアルバイトをしているのだろう。矢島は着物を極力痛めないよう、穴の線に沿って針を動かした。

「今日は店を貸し切ってお祝い。私たちもこれから着付けをするのよ」

鮮やかな振袖に、螺旋を描いたロングのウィッグ。サイドに赤いガーベラが咲き、ビラが揺れる。片側に垂らしたウィッグに、小花が散りばめられていたら素敵だ。帯はどんな風に結ぶのだろうか。リボンのような文庫か、理央と同じ立て矢結びなのか。

鉄雄がつけまつ毛の角度を調整し終えた頃、糸を緩めに結んだ矢島が、鋏を使って残りの糸を切った。蓮のスマホにタクシー会社から到着の電話が入り、立花がエレベーターのボタンを押しにい

った。

繕い終わった袖を見せてもらった。流水に無数の花びらが舞い、金糸が眩しかった。

「本当にありがとうございます」

「お母さんにそっくりですね。よろしくお伝えください」

最後に、鉄雄が白いショールを掛けてくれた。マスクから見える目尻に、うっすらと笑い皺が刻まれていた。理央も自然と笑みがこぼれてきた。ドアを開けると、立花がエレベーターの前で、理央を待っていた。

「理央ちゃん、成人式おめでとう。いつてらっしゃい」

まもなくあのイスに、立花が座る。美容室の天井から下がるLEDライトと、矢島の店のライトが、新成人の立花を照らすだろう。

「白崎さん、葦原さん。また大学で会いましょう」

「はい。来期は対面で会いましょうね」

「今日はありがとうございます。理央、早く！お母さん、待っているよ」

その日、初めて蓮が、母のことを「お母さん」と強い口調で呼んだ。蓮はエレベーターの数字を追いながら、苛立たしげにため息を一つ吐いた。

「大丈夫？」

同級生の坪井葉月から、個別ラインが届いた。葉月とは高校のグループラインで繋がっている。

大学二年目の春、ようやく対面授業が始まった。蓮や女友だちと、地下鉄で待ち合わせをし、学食でランチをした。教科書の重さと講義の長さが、大学生になったと、ようやく実感させてくれた。ラインを受け取ったあとに、葉月と大学生協のベンチで待ち合わせをした。葉月とはグループ内で交流はあるけれど、一対一で会ったことは一度もなかった。

「立花くんの噂、聞いている？」

立花とはゼミのあとに学食でランチやお茶をしている。

「噂って？」

「バイト先の子が立花くんと同じ高校で、彼、バイなんだって。彼女がいたのに、他に好きな人が出来たから別れてくれて。その好きな人が、実は男だったんだって。理央は立花くんと仲が良いみたいだけど、大丈夫なの？」

立花の性的指向が、葉月の一言によって明らかとなった。白いもやだった疑問も、一気に見通しが良くなったけれど、葉月への苛立ちなのか、それともマスカラがダメになっているのか、まぶたが小刻みに震えた。

「ただの友だちだよ。蓮だって知っているし」

性的指向だけではない。本人の了承を得ずに、他人によって宗教や政治、思想が暴露されることは、プライバシーの侵害だ。

理央は立花が矢島の店で働いているため、漠然と恋愛対象は男性だと決め付けていた。正直、彼女がいたことは、まったくの想定外で、まさに虚をつかれた。大学でも、男女限らず、立花を見つめる視線には、奇異なものを見るような歪みがあった。女装の域には達していない、ユニセクスの服装と髪型は校内で目立っていた。

立花はこの前、バイト先の矢島の店と、鉄雄の話をしてきた。大学の講義に響かないよう、週三のペースで働いている。矢島から化粧の方法やウィッグの付け方など、一通り教わったと聞いた。鉄雄は月曜日の夜、店で炒飯を作る。炒飯はキムチとなめ茸を隠し味に使ひ、絶品らしい。理央も鉄雄が作る炒飯を食べてみたくなった。

立花のスマホには成人式の写真が保存されていた。振袖姿の立花を中心に、藤色の訪問着姿の矢島や、ドレスを着たスタッフ、和服姿の鉄雄が笑っていた。

立花は今、好きな人はいるけれど、片思いだと漏らしていた。理央と蓮が羨ましいと笑う顔は、どこか寂しげだった。立花の好きな人は、いったい誰なんだろう。自分の知っている人間なのか？
男か女か？

「理央は友だちだと思っけていても、向こうは気があるのかもよ。気をつけてよ」

わざわざラインを送っけてきて、なにが気をつけろだ。立花は話題も豊富で、大学での授業態度も真面目だ。葉月は合コンの話や、痩せたか太ったかの話題しかない。

バイトがあるからと、理央は席を立った。生協の入り口では、来年の成人式用の振袖レンタルの

チラシが貼られていた。成人式から半年も経っていないのに、一年前の出来事のようにだった。

サークル会館の入り口では、エゾヤマザクラの花びらが風に揺れ、足元で小さな渦を描いていた。

ラブホテルのシーツは、いつもひんやりとしている。糊が利き過ぎた薄い部屋着に袖を通すのに、毎回抵抗を感じた。

冷房が効きすぎた部屋に牛井の臭いが充満していた。蓮がコンビニで買った発泡酒を開け、喉を鳴らして飲んだ。理央はコンビニで散々迷った挙句、炒飯を手を取った。頭のどこかで、いつも鉄雄が作る炒飯を想像していた。

「坪井からライン来ていたぞ。理央と立花のこと、心配していた」

炒飯の容器を開ける手が止まった。生協のベンチで、葉月から立花のことを忠告されてから、これこれ一ヶ月が経とうとしていた。

「蓮は、まさか真に受けてないよね」

店員が電子レンジの時間設定を間違えたのだろう。ふやけた炒飯のフタから、水滴が落ちた。カーペットにこぼさないよう、熱くなったフタを注意深く裏返した。ふと、葉月の好奇心に満ちた目を思い出し、舌打ちを飲み込んだ時、紺色のカーペットに小さな油染みができてしまった。

「俺、立花はそっち系だから大丈夫だろうって思っていた。だから……」

小さな染みは、理央の中で瞬く間に大きく広がった。消えた舌打ちは怒りの感情となって現れ、

蓮の言葉を遮った。

「ちょっと待ってよ。そっち系って言い方、ひどくない？」

「なに怒ってるんだよ。テレビに出ているゲイの奴らだって、自分のことをオカマって言ってるだろう。それよりも、俺の方が怒りたいよ。坪井から聞かされるまで、俺は立花なら大丈夫って思っていたんだぜ。まさかバイだとは思わなかった」

「大丈夫って、蓮まで葉月と同じことを言うの？」

蓮と葉月は大丈夫という言葉を使って、立花のことを異端視扱いしている。

理央は、立花から発する穏やかな空気が、心地好かった。同世代の男のような荒っぽさや騒々しさもなく、女友だちのような意地の張り合いもない。立花の前では自然体でいられた。そうして、立花の背後に、鉄雄と矢島の影をいつも感じていた。

「面白がって好き勝手なことを言う連中だっているんだよ。現にクラスの奴から、理央をオカマに取られるなって言われた。俺、一瞬そいつを殴ってやろうかと思った」

「ひどい」

蓮は、たとえそれ以上の下品なことを言われても、殴りはしないだろう。薄っぺらい笑いを浮かべながら、話を合わせていたに違いない。

膝の上に置いた炒飯が、どんどん冷めていく。牛丼をあらかた食べ終えた蓮が、ベッドサイドのデジタル時計をチラリと確認した。

「炒飯、食べないのか？　せっかくハーゲンダッツも買ったのに」

「両方ちゃんと食べるよ」

喧嘩をしたあとの、仲直りのセックスには二パターンがあるという。怒りの感情と興奮がそのまま快感へと繋がり、愛情が深くなるパターン。もう一つは、セックスをすれば解決するという、機嫌を取るためだけの妥協策。

蓮とは、まだ大きな喧嘩をしたことがなかった。小さな喧嘩の原因は、蓮の遅刻や、デートでなにを食べるか、どの映画を観るかぐらいだ。

「俺は立花のこと信じているよ。成人式の時だって助けてくれたし」

隣から手が伸びてきた。

理央は即座に、仲直りのシグナルだと、察知した。もし、ここで振り払ったら、二人の間に大きなしこりができてしまう。まるで体内に入った病原菌のように。

世の中のカップルや夫婦も、互いの腹の中に、いざこざを起こす種を持っているのかもしれない。些細なきっかけや揺さぶりで、種は瞬く間に発芽し、茎が伸び、葉が茂り、実となる。その頃には、体内はウイルスで侵されているのだろうか。

蓮の牛丼に付いてきた紅生姜を思い出した。袋から出した毒々しい色が、つゆだくの牛肉と玉ねぎを汚していた。自分の中に潜む種も、元の色がすでにわからないくらい着色料にまみれているのだろうか。

コンビニの炒飯は油っぽく、胸焼けがした。上に乗ったチャーシューも胃に重かった。

「鉄雄さんの炒飯、この前は豚キムチ味だったんです」

ふと、立花の笑顔が浮かんだ。学食の窓から差す日の光が、マスクを外した頬を照らしていた。ピンク色のチークにほんのりと甘い色が差した。

一瞬のひらめきは、強い確証となった。

立花の好きな人は鉄雄だ。まるで清涼剤を飲んだように、胸のつかえがすーっと取れた。

コシヨウが効きすぎた炒飯を、義務感で黙々と食べている時、シャワー室の脱衣場から蓮の鼻歌が聞こえてきた。

マスクをずらして、ライラックの匂いをかいだ。学食の入り口には、八重桜の隣に、薄紫色のライラックが植えられていた。せつかくの香りも、マスクをしていたら台無しだ。対面授業が始まった時、食事以外の場所では、マスクはもはや必須アイテムだ。最近ではマスクのせいで、肌荒れをするようになった。

「バイトの前に時間取れる？」

立花からラインが届いたのは、障がい児の通所施設でのソーシャルワークの実習が始まった頃だった。理央は短い文面に、身構えた。世間話の類ではないことが、シンプルな文面で察した。もしかして、鉄雄のことか。思いつめているのだろうか。

待ち合わせ場所の午後の学食は、人影もまばらだ。観葉植物の向こう側に立花を確認した。各座席にはパーテーションが取り付けられ、立花の影が歪んでみえる。教科書をパタンと閉じた音がアクリル板に反響した。

「立花くんもこれからバイト？」

「スタッフがコロナに感染して、いつもよりシフトが入っているんだ」

「大変だね」

近しい人間の家族や親戚、職場で、着実に感染者が増えてきていた。目に見えないウイルスは、息を潜めながら虎視眈々と様子を伺っているのだ。

「単刀直入に言うね。僕と白崎さん、もう会わない方がいいと思うんだ」

「ちょっと待って。どういうこと？」

身構える隙もなく、剣を一気に振り下ろされた感覚だった。二人の間に置かれたアクリル板が、より一層隔たりを作った。

「僕の噂が大学で広まっているみたいで、白崎さんや葦原くんにも迷惑がかかる」

本人の口から出た噂という言葉に、外部からの圧力を感じた。「大丈夫」の三文字を口にする葉月が一番に思い浮かんだ。心配する思いも、時として悪意に変わる。

「噂なんて関係ないよ。私は迷惑だなんて思っていない」

「白崎さんの耳にも入っているんだね。噂は本当なんだ。彼女がいるのに、男の人を好きになって

しまったから」

その人物が鉄雄なのだろうか。理央は気持ち激しく波立っていた。学食へ向かう途中も、どのように立花を慰めれば良いのか、浅い経験の中で積んだ言葉の引き出しをひっくり返していた。

「彼女には悪いけど、他に好きな人ができたのは、仕方ないよ」

「良い子だったんだ。最初はふざけて彼女のワンピースを着せられて……」

立花は静かに語ってくれた。彼女は派手なグループに属さない、素直な女の子だった。優しく、いつも歌うよう笑っていた。冗談の通じない不器用さも魅力の一つだった。

彼女の服を着て、薄化粧をし、二人で外出した。学祭の模擬店でのメイド服も好評だった。最初は楽しんでいた彼女も、開眼していく立花の内面を感じ取り、戸惑うようになった。立花は女装によって、自分が解き放たれていく快感を覚えた。

「そんな時に偶然、SNSで矢島ママの店を見つけたんだ。気が付いたら店の画像を無我夢中で検索していた。スタッフが成人式の着物を着せてもらって、うらやましかった」

彼女の戸惑いは、不自信や猜疑心へと変わっていったそうだ。

「思い切って店に行ってみたんだ。ママから高校を卒業したら、話を聞いてあげるから、今は受験勉強に専念しなさいって言われた。スマホの画面よりも綺麗な人で、一目惚れだった」

理央の驚きは短い悲鳴となって、喉の奥でかき消えた。立花は鉄雄ではなく、矢島が好きだったのだ。理央は立花の語りに、いっさい口を挟むことができなかった。同時に、彼女の心情を想像

ただだけで、様々な思いがあふれ出し、混乱し、途方に暮れた。

マスクの上の瞳に、暗い影がおりた。

「彼女のことは、ずっと悩んでいた。傷付けない方法を見つけようとしたけれど、無理だった」

立花は逃げるように受験勉強に没頭した。第一回目のコロナウイルス緊急事態宣言が発表になった頃、大学の合格発表があり、ようやく彼女ときちんと向き合う決意をした。

「ほかに好きな人がいるんでしょう。誰なの？ 私の知っている子？」

初めて男の人を好きになったと告げた。彼女のことは決して嫌いになった訳ではない。この気持ちには嘘でも同情でもない。

それ以上にその人を好きになってしまった。

彼女は立花が女性ではなく、男性に気持ちが移ったことが、受け止められなかった。だからといって、クラスメイトの女子にとられるのも、耐え難かったそうさ。

「その男の人と、もう付き合っているの？」

「告白もしていないんだ。付き合えるかどうかも分からない」

彼女は泣きそうな顔にべたりと笑顔を貼り付け、最後に、こう言い残したそうさ。

「良かった。二股を掛けられていた訳ではなかったんだね」

彼女はごく一部の人間に、振られた理由を話した。その中の一人が面白おかしく脚色をつけ、「ここだけの話だよ」とグループラインにあげた。コロナ禍で、人との繋がりを失っていたグルー

プは、格好の獲物に飛びついた。退屈は悪だ。噂は瞬く間に広がり、膨らんだ話を耳にしたのが、葉月だった。

「最近、ようやく彼氏ができたって聞いた。本当に良かった」

ゆっくりと立花が、理央に視線を向けた。アクリル板越しに一緒にいたはずなのに、実際の長さ以上の距離を感じる。

「私、実はね。立花くんは鉄雄さんが好きだと思っていたの」

立花が大きく吹き出した。

「僕が女装をしているから、そう思ったの？ 残念だけど鉄雄さんのライバルにもなれませんよ。今はママの元と一緒に働きたい、それだけです。ママはクールに見えるけど、どこか抜けていて、涙もろくて、可愛い人なんです」

「つらくないの？」

理央はアクリル板の隙間から、立花の手を握っていた。初めて触れる立花の指は、第二関節の硬さが男のものだった。立花は困ったように笑っていた。きっと別れ話を切り出された彼女も、同じ表情だったのだろう。

アクリル板が気の抜けた音を立てて、大きく揺れた。

理央と立花は同時に横を向いた。食堂の窓から差す日の光が、蓮の肩先の輪郭を黒くなぞった。目の前にある蓮の手は、小刻みに震えていた。拳がうっすらと赤く腫れあがっている。

「その手を離せよ」

「蓮、違うよ。私が……」

接着剤で補修したアクリル板に、一本の亀裂が走っていた。アクリル板を下から支えるスタンドが、グラグラと揺れている。

「なんだよ、お前。馴れ馴れしく理央に触るな」

「蓮が誤解しているだけだよ。立花くんとは何もないから」

「だってこいつ、男も女も好きなんだろう」

立花の目が絶望の色で灰色に濁った。何もかも諦めたような表情が、理央の胸を締め付けた。

ほぼ同時に、右上に向かって伸びたアクリル板の亀裂が、理央の胸に深い傷を負わせた。まるで雪山にできたクレパスのようだ。溝は底が見えないくらい、どこまでも白く冷たい闇が途方もなく続いた。

その場で立花は、深くこうべを垂れた。

「すみませんでした。もう白崎さんには近付きませんから」

「いい加減、俺も理央も迷惑なんだよ」

理央の中で、亀裂の入ったアクリル板が真っ二つに割れた。マスクの下の呼吸が荒くなり、鼻と口を覆うマスクのひだが前後に動いた。

立花は顔をあげ、その場から立ち去ろうとしている。

「待ってよ。私は迷惑だなんて思っていないよ。立花くんは何も悪くないじゃない」

「理央、お前なに言っているんだ」

蓮の一言で、理央は深いクレパスの中から這い出ることができた。まるで雪山の上に広がる青空を、仰ぎ見たような爽やかさだった。理央の中で大きな気付きが生まれた。

「おかしいのは蓮や葉月の方だよ。噂に振り回されて、立花くんを傷付けているだけじゃない。当事者でもないのに」

「俺はお前の彼氏だぞ。心配するのは当たり前だろう」

蓮に怒鳴られたのは、初めてだった。言葉の圧力に、膝小僧の裏側が冷たく強張った。いつでも蓮は自分や周りを笑顔にさせてくれた。だからしない所や大雑把な所があっても、心根だけは真っ直ぐだと信じていた。

脳裏に走った感情は、理央の右手に「動け」と信号を送っていた。

開いた掌に、マスクの繊維の感触と、鈍い痛みが残った。蓮の頬を打った瞬間に、小指の爪がマスクの紐を引っ掻いた。

蓮の目が、数センチずれたマスクから覗いた。何が起こったのか、信じ難いと右や左に忙しなく泳いでいる。

「白崎さん、何があっても暴力はダメだよ」

「立花くんも変だよ。ひどいことを言われて、なんで何も言い返さないの？」

「理央、俺よりも、そんなに立花の方が良いのか？」

「だからなぜその話になるのよ」

理央の中で発芽した、いぎこぎの種は、どこまで伸びているのだろうか。もうすでに茎が天井を破り、大きな花を咲かせているのかもしれない。花の行方を案じながら、いつも触れていた蓮の頬の感触を忘れてしまった。それと同時に、その場から逃げようとする立花にも、苛立ちを隠せなかった。

マスコミや学校のオリエンションでも、こぞって多様性を口にする。

そもそも多様性ってなんだろう。人種や民族、宗教、性的嗜好から性自認など、顔の数だけ個性がある。お互いの個性や違いを認め、差別することなく尊重し合う。まるで道徳の教科書の一文のようだ。

多様性の名の元で、立花は腫れ物に触るかのようになり、いつも特別視されていたのだろう。けれども実際は、蓮や葉月などの大多数の人間に、過剰に反応され、価値観を押し付けられた拳げ句、攻撃を受けた。そうして立花は、逃げ続ける。

革靴の音が近付いてきた。

「君たち、食堂では黙食厳守ですよ」

学生課の職員が、血相を抱えて現れた。離れた席にいる数人の学生が、こそこそと食堂から出ていった。

頭の芯が思いのほか冷静だった。蓮や立花に何も言わずに駆け出した。

「待てよ、理央」

アスファルトに雨粒が一つ、二つと落ちた。ライラックの花が水気を含み、小刻みに揺れている。理央はスマホの美容室予約アプリを立ち上げ、鉄雄の店の空席確認をタップした。

〔編集者注記〕

同名の作品（400字詰21枚）は小誌第23号に掲載しておりますが、今般、筆者は作品構図の変更と約40枚の加筆を伴う改作を行っております。

背筋

中村郁恵

結婚を半年後に控え、私は初めて婚約者の実家で夕食の手伝いをしていた。濃い木目の食器棚から茶碗や皿を取り出していたときだった。最下段の奥に、雪曇りの空にも似たどんみりとする翳りが眼にとまった。凝らして見ると、細い筒状の箸立ての真中で、幾本もの取り箸で守られるようにスプーンが一本立っていた。あえて、金属一本だけを中心に置く違和を感じながら、この一本に呼び止められた気もしていた。

私の右手は、無意識に箸立てを引き寄せていた。箸より僅かに背の高いそれは、テーブルスプーンに属するのだろうか、一般的な形状とはやや異なっていた。掬う部分が浅く尖り気味の先端は、へらとナイフの役目も併せもつ風だった。微細な傷が交錯する面から金属の艶はすでに失われ、昼

白色の照明を鈍く反すのが精一杯だった。愛用の域はとうに越えて、酷使を思わせる歳月が滲み出ていた。

「それはね、お父さんがシベリアから持ち帰ったスプーンなのよ。今は使っていないけれど、いつでも目に入るように立てているの」

私に向ける視線に気づいた義母の声だった。

「お義父さんが使われていたものですか？」

「十一年間通してかはわからないけれど、自分たちの部隊で作って共にしてきた一本だったらしいの」

数多の傷の意味が、私の声を絞らせた。

「触ってもいいですか？」

「もちろん。触ってあげて」

右三本の指先に気を集め、鎮まりを固めているスプーンを抜きだした。大きさの割に軽かった。アルミ素材というだけではない。全体的に薄っぺらな作りが、心許なさをこぼしていた。変色が生んだ斑模様。無秩序な点描と化した傷と傷。〈戦慄の日日〉などと、安易に表現してはいけないだろう。だがそこには、紛れもなく戦禍の記憶が浸み込んでいるに違いなかった。私は照明の真下に行き、スプーンの裏面にそっと自分を映してみた。近づけても遠ざけても、顔の輪郭は象れない。セーターの赤も淡く、私はもはや気配でしかなかった。たとえ高純度の光に射されても、跳ね返す

力など残されていないだろう。けれど、柄に歪みはない。保ってきたゆるやかな反りからは、生命を繋ぐ道具として握られていた日だが、濃い粘度で沈着していることだけは読みとれた。

「お父さん、戦争のことは私にも息子たちにも殆ど話さないから、聞かないことにしているのよ。だから、あなたも何も尋ねないでほしいの。これだけは絶対、約束してね」

強さを伴った義母の低い声は、〈約束〉を絡め耳元に重く落ちた。終戦から二十年後に生まれた私が初めて知る、戦争のリアルな質量だった。

大正十一年生まれの義父は、札幌一中（現札幌南高校）を経て、昭和十四年に陸軍士官学校に入校。歩兵科に配属する職業軍人となった。陸軍大尉で敗戦を迎え、満州からシベリアに強制移動。各地収容所を転々とする十一年間の抑留生活を余儀なくされた。厳寒のなか、レンガ積載や左官などが義父の携わった主な強制労働だった。ソ連軍に蹴られ、殴られ続け、左耳の聴力をほぼ失った。後遺症として耳鳴りの常態化と眩暈の要因となった。加えて慢性的腰痛も抱えてしまった。昭和二十八年十二月の第一次を皮切りに日本への帰還が開始されるが、かつての部下全員を先に帰国させた義父は、昭和三十一年の年の瀬に最終梯団で舞鶴に帰還した。これが、結婚前に義母と夫から語られた全てだった。

初めてこの家を訪れた際、義父は古希を迎え仕事を辞したばかりだった。

「若い頃、できなかった旅行に行き、俳句を習い、第九を合唱してみたいんですよ」

仄かな照れをのせた頬の柔和さに、私の緊張は瞬く間に解けていった。元職業軍人とは聞いてい

たが、一六〇センチメートルの細身で隊を率いた軍服姿を、眼前で微笑む義父からは想像しきれなかった。この第一印象は、以後も変わることはなかった。本来、心身ともに充実すべき二十代を戦争に翻弄された人なのかと疑うほど、質朴ながらいつも眦まで莞爾として微笑んでいた。周囲の会話を割り込むことはしない。左耳で音や声を拾えなくても「みんなが楽しそうだからそれでいい」とひとり頷く姿に、最終帰還を希望した片鱗が見えた。この性格は、壮絶な抑留経験に結果したものではないらしかった。義父の弟たちは「兄さんは子どもの頃から穏やかだった。よく変わらずに帰ってきたものだ」と口を揃えた。

傷に覆われたスプーンと、傷以外の何かも抱えている義父。この具象と抽象を、いつしか私は単眼で結んでいた。だが、義父の重心は、笑顔の表裏、その空際に介在する闇のなかだと直感していた。戦争を知らない私が臨む闇は暗澹としすぎ、垣間見るだけでも迂遠の道のりに思えた。真の重心は、義父のどこに位置しているのか。

実際、義父が戦争を話題にすることはなかった。原爆投下や敗戦にも言及することはなかった。息子である私の夫には、

「戦争は二度としてはいけない。戦争のない社会、世界を築くために努力しなさい」

機会があるたび静かに説きはしたが、自らの体験をつぶさに語ることはなかったという。

あまり感情を表出しない義父だったが、私の誕生日を知った瞬間は、ソファアに預けていた背筋を伸ばし、驚くほど声高になった。

「三月十日生まれ！ これはすごい。すごいぞ。我が家に陸軍記念日のお嫁さんが来てくれるとは！」

以来、私の顔を見るたびに（陸軍記念日）の五文字が、居間の天井や壁に力強く跳ね返った。私という個より生まれた日の偶然が、義父を喜悦満面にすることはいささか複雑ではあった。だが、声も肩も弾ける義父を見ると、すべてが些細なことに思え、私も一緒に笑っていた。戦争を話題にしたがらない義母も、この時ばかりは笑顔の輪に加わった。

義父と義母は、互いの父親同士が親しい間柄である縁で、シベリアから帰還した翌年に結婚をした。結婚当初は、時折見せる義父の表情があまりに険しく、義母は声をかけられないこともあったという。なにも語らない義父を代弁しているような表情から、抑留生活の厳しさの片鱗を悟ったとも言っていた。どうかして、義父に安らぎを与えたいと義母はつとめて朗らかに笑うことにしていた、と話してくれたことがあった。私に見せる温厚な義父からは想像しきれなかったが、戦いの最前線に生命を預けていたことを思えば当然なことは明らかだった。陰からさり気なく、時には盾になり支えてきた義母にとっても、心休まる日は少なかつたに違いない。だから、戦争の話題になると人一倍敏感な義母であった。義父の分も含めた戦争に対しての憤りを、語気の荒さから感じることがもたまにあった。終戦記念日が近づき、たまたま視聴していたテレビ番組で戦争に因んだ特集が流れると、義父は言葉を発しない代わりに唇を強く結んだ。その表情を察知した義母は素早くテレビを消し、意味のない世間話を鏝めて沈鬱が充ちかけた空気を砕くのが常だった。

なのに、あのスプーンとは食卓を囲んでいる。視野に入るたび義父の心は波立たないのか。歲月による希薄や忘却から堅持するためか。戦死した仲間たちの弔いなのか。十一年間も抑留されたにも関わらず、なぜ陸軍を懐かしむことができるのか。職業軍人という選択に後悔は一度もなかったのか。帰国を諦めなかった支えは何だったのか――。拙い疑問は尽きなかった。けれど、たとえ〈約束〉を強要されなくても、乾くことのない傷口にあえて触れるなど、できるわけがない。義父と接するたび執拗なまでに浮上する疑問は、当然の制約という屹立した壁を前に、萎み方も覚えず、帰納する術も見出せないまま、溶けきらずに私の奥底に沈殿していった。

長男の小学校入学を機に、我が家は夫の実家の隣に居を構えた。当然、義父と接する回数も増えた。いつも微笑んで迎えてくれる義父は、時折り陸士時代の想い出を口にした。訓練の様子や尊敬する先輩からかけられた言葉などが主だったが、ふとした瞬間、義父の眼が悠遠な時間を見晴らすことを、私は見逃さなかった。真向かう私を透過し、述懐の域から語る義父の眼は、明るさと慈しみで充ちていた。居間に射し込む陽に負けない明度で放たれる眼差しに、私はようやく気づいた。義父にとって、戦争と陸軍が別次元に位置していることに。その乖離の本意までは辿り着けなくても、陸士は否定できない誇りであり、青春そのものだったのだ。だが今は、志願して軍人になった事実には、胸を張る時代でも世間でもない。義父は誰よりもそれを自覚していた。だから、せめて狭い自宅の居間でなら、見えない圍繞の一斑を外すことが許されると思っていたのかもしれない。

義父と陸軍と一本のスプーン。これらの結合点はどこにあるか。その一点に抛り、少しでも義父

への理解に漸近する焦点として捉えたいと思った。義父といえ、挨拶を交わすとき揃えた十本の指を両腿に密着させ、ほぼ直角で頭を下げる姿勢。四角四面に物を畳む手順。本棚に並ぶ陸軍関連の書籍に、軍隊の名残りを見る程度だった。孫たちには、

「人同士、意味のない争いをしてはいけないよ」

「挨拶をする時はきちんと立ち止まって」

「話を聴く時は相手の眼をしっかりと見て」

この三点を優しく諭すだけで、微笑みを絶やさないおじいちゃんだった。結局、義父は温和な表皮の裏側にすべてを沈下させたまま、平成十九年の春、闘病の末他界した。

亡くなる前日に、義母と子どもたちと見舞ったときだった。もう瞼を開くことも、私たちの呼びかけに答えることもなかった義父が、突然声を発した。

「燃えている。燃えているぞ！ 早く火を消せ、消すんだ。だめだ、逃げろ、走れ！」

今まで聞いたことのない強く厳しい口調だった。子どもたちに怪訝そうな眼を向けられても、私はすぐに返すことができなかった。

「大火事の夢でもみているのかな？」

六年生になった長男のひそめた声が、静まり返った病室の床でゆっくり転がった。

「そうだね。きつと、みんなのことを心配して強い言葉になったんだよ」

私は、子どもたちの強張りをほぐすように明るく務めたが、義父の口調は続いた。

「急げ。急ぐんだ！ わかっているな！」

だが、その後は急に不明瞭になり、

「…は…どう…した」

言葉として聞きとれなくなり、声もしだいに萎んでいった。

沈黙が個室の狭い空間に充ち、私は、息子と三年生だった娘を促した。

「火はもう消えたよ。みんな避難して無事だから、安心しておじいちゃんも休んでね、って言ってあげよう」

もちろん、火事でないことは義母も私もすぐに解した。譚言の場面が、いずれの戦場かシベリアなのかは判らない。けれど、それは紛れもなく私に見せた、最初で最後の大尉としての一片だったふいに、あのスプーンが脳裡を掠めた。一本の金属に刻まれた傷一つ一つが、義父が体験そのものであり、ろ過しきれない感情の点在にも思えた。その一つがたった今、発せられた場面なのだ。義父は、最期の最期に夫や父親の役目を脱ぎ、ようやくひとりの陸軍士官に還ることができたのだ。

にわか膨らんだ狭量な想像は、安堵にも似た温かなものを私の内側に滲ませていった。だがそれは、義父を際限のない深みからほんの僅かでも引き上げてあげられなかった、私自身の魂鎮めであることも、ひそかに自覚していた。

義父が他界した後も、私はほぼ毎日義母とは顔を合わせ、義父を偲ぶ話に耳を傾けた。

「お父さんは、ほんとうに我慢強い人なの。真面目で優しく。だけど、融通が利かないのと、お

人好し過ぎるのが難点だったのよ」

どんな話題が上つていても結局義父に辿り着き、この言葉で締められた。スプーンは、変わらず姿勢正しく食卓テーブルの真中に位置し、義母と食事を共にしていた。その義母が逝ったのは、令和五年が明けてすぐだった。

義母の初七日も過ぎ、私は二人の部屋を少しづつ整理していくことにした。義母がすべてきちんと管理していたので、これまで私がこの部屋の物に触れることは殆どなかった。義父が愛用していた机もそのまま遺されていた。木目の天板に触れると、この椅子から振り返って私を見る義父の微笑みが静かな声と共に蘇った。何気なく机上の本棚に眼を移した。すると、隙間なく並列する書物の中で背にタイトルがない単行本が眼に入った。クラフト紙に似た薄茶色で装丁されたその一冊が、私の手呼んだ。迷わず右手を伸ばし人差し指をかけた。取り出した硬い表紙にもタイトルがない。開くと、中表紙に『自分史・死生、命あり』と太く濃く記されていた。間違いなく義父の文字である。全四二三頁。平成十二年に義父が著した一冊だった。決して上等な紙質ではないが、製本会社に依頼したのだろう。しっかりとした糸綴じである。本の重みを手のひらで受けとめながら、私の脈は一瞬収縮したと思った途端、今度は急に速まった。拍動が、身体中の内側を強く叩きだした。部屋の整理などすっかり失念した私は、僅かに震える指で次頁を急いだ。

〈はしがき〉には、こう記されていた。

私個人の事ながら此れ迄体験したこと考えた事等を書き残すことにより、私の後に続く者への処世上の一助にでもなればと願う。

(中略)

一人の歴史の証人としての意味で書き残したいと考えている。

お義父さんは、ちゃんと残していたんだ——。

自分史を作成していた驚きよりも、伏せていた鬱屈の歳月を自らの言葉で置換できた安寧の方が胸を占めた。義父に、真の終戦など訪れることはないだろう。けれど、いまを生きる時間と過去になりきれない時間。その二流れの時を、勁健な理性で客観的に顕現させようとした証が、刊行という帰結を選ばせたのだ。おそらく、私の想像を絶する史実がつぶさに記されているに違いない。まして、親しい人の確かな痕跡となれば、感受の受け皿も靱く厚くすることは必至だと思った。眼を伏せずに読みきる覚悟が、私にはあるか？ 夫はこの一冊の存在を知っていたのだろうか？ ほんとうは、すぐに表紙を捲りたかった。だが、まずは単身赴任中の夫に確認してからと思ひ、その晩電話をかけて自分史のことを伝えた。

「へえ。全然知らなかった。ふうん」

私の想像した返答とはまったく違い、夫は他人ごとのように熱のない反応を見せたあと、

「そうなんだよ。結局、いつもなにも言わないんだよなあ」

こう、不機嫌に続けた。義父が一冊にまとめ上げていた事実よりも、内緒にされていた不満、苛立つ感情が先立っているのが伝わってきた。これが、実の親子、血縁有無が左右する正直な距離感なのかもしれない。義父は、私たち二人も含めて遺してくれたのだろうが、夫と私では捉える方向性が違うのは仕方がないとも感じていた。私は、親しい他人という領分から、義父の強靱な精神の真下で、疼き、うねり続けていたものに近づくことを決めた。

翌日から私は、義父たちが使っていた部屋の窓に小さな椅子を移した。いよいよ、自分史を開いていく私は、真冬の、しばらく使われていなかった部屋にも関わらず頬に火照りを感じていた。熱い頬を凍てた両手で数秒押さえた後、緊張から微かに震える指先で、永く眠っていた頁を追い始めた。

本編は、第一部の〈生い立ち〉から始まり、〈軍隊〉と区分された第二部には、陸軍士官学校に入校した昭和十四年から復員までの昭和三十一年が、約二〇〇ページに及び収められている。

昭和十四年十二月、陸軍士官学校入校。生徒隊第一中隊第一区隊配属。訓練の内容等が細かに記されている。昭和十六年、上等兵となり一時満州ハイラルに赴く。昭和十八年、陸軍少尉を命ぜられ、下士官候補の教育に当たる。昭和十九年、中尉に進級。義父が率いた中隊は、小隊長要員の中心・少尉四名、准士官・下士官四十五名、兵八十五名、総計百三十四名で構成されていた。この隊員で吉林の満州部隊に転出。夜間機動演習図に加え、士気高揚を図るべく自作した中隊歌も文中に組

み込んでいる。ページが捲られるに従い、厳しさを増す戦況下だからこそ任務を全うしようとする若い将校の姿が、史実の隙間からありありと浮かんできた。

そして、昭和二十年八月十五日。敦化の旅団司令部にて玉音放送を聞くが、すぐに真偽を確認できなかった。十六日夕刻、旅団命令が下った。吉林に集結すること。途中、ソ連軍と遭遇した際は要求された武器を引き渡すこと。義父は現実を受けとめ残留部隊の最高責任者として吉林に急ぐ判断をした。夜を徹し暗号書等の機密書類を焼却したという。十八日、旅団司令部より「ソ連軍による武装解除が行われる」ことを聞く。その際、信頼する参謀よりこう諭された。

「中村、決して死ぬなよ！ 大命による終戦であることを肝に銘じ、早まった事を決してするな！」

義父の心の迷いはこの一言で払拭されたという。九月一日。沙河沿將校収容所に収容された。十月、ソ連軍の責任者より、

「おめでとう。皆さんはこれから日本に帰国するための列車に乗る訳ですが、くれぐれも健康に気をつけて帰国してください」

こう説明された全員が満面の笑みで列車に乗り込んだが、到着したのはシベリアだった。そこからは、ラーダ収容所を経てエラブカ収容所へ移送。食糧不足、銃剣と罵声に追われ落伍者も増えた。加えて腸チフスが流行し死亡者も出たという。

昭和二十三年、日本への一時帰国が始まったが、義父はハバロフスク第十四分所へ移管される。

昭和二十四年四月より戦犯調査開始。ハバロフスク監獄に収監された。常に監守が見張る狭い部屋に四人が収監され、食事は一日三百グラムの黒パンとトマトの漬物が入ったスープのみだった。六月、ソ連非公開軍事裁判により一方的に戦犯とされ、強制労働二十年の判決を受ける。義父は左官に従事したが、凍土掘りに携わったなかには肺炎を起こし倒れる者、自死する者もいたという。だが、これまでの体験で得た要領を巧みに生かし皆でノルマを達成。収容所全体に労働報酬が少し入るようになり、その代金でバターや砂糖を購入、皆で分け合ったという。

昭和二十七年になると祖国への一か月に一度の通信が許可された。半信半疑ながら義父が書いた往復葉書は、無事札幌の実家へ。二か月して懐かしい父親の筆跡でハガキが一枚手元に届いた。家族との通信は、昭和三十一年九月までおよそ五十通に及び、義父の支えとなった。

ロンドンで開かれた日ソ共同宣言に並行するように、長期抑留者の祖国帰還は、昭和二十八年十月の第一次帰還を皮切りに随時行われた。最終梯団第十一次帰還者は、義父を含め一〇二五名。帰国にあたり、新品の衣類や防寒着が支給されたと記されている。いよいよ昭和三十一年十二月二十一日ハバロフスク駅を出発。二十三日にナホトカ着。〈興安丸〉はすでに接岸しており、十一人ぶりの日章旗が涙で霞んだ。船中では赤飯を含む日本食が振る舞われた。二十六日、舞鶴港着。出迎える人で賑わうなか、

「稔ちゃん！ 稔ちゃん！」

自分の名を呼ぶ声に振り返ると両親の姿があった。検査や慰霊祭等を済ませ各自解散。当時は、

飛行機や新幹線はなく、列車と青函連絡船を乗り継ぎ、大晦日によやく札幌駅に降り立った。最終梯団では十名が札幌まで一緒だった。カメラマンを含めた報道陣や、道庁・市役所関係者など出迎えの人々が集まる駅前広場に整列すると、「万歳！ 万歳！」の歓呼に寒空は沸いた。大勢の歓迎に真向い、十名は一列横隊に並び全員拳手の敬礼。そして、義父が代表して帰還の挨拶を述べた。

「ソ連に於ける十一年に亘る抑留生活を終え、只今帰って参りました。これも偏に日本政府そして日本国民のご支援があったればのことであり、この点衷心より厚く御礼申し上げます。

我々は十一年間の体験を通じ世界で最も有り難い国は日本であり、世界で最も温かい人は日本人であることを確信した次第であります。

今後は遅れ馳せ乍ら、皆様の驥尾に付し祖国復興に微力を捧げる所存でございますので、何卒宜しくご指導ご鞭撻賜ります様お願い申し上げます。

本日は、特に年の瀬も押し詰まった大晦日で何かとご多用にも拘りませず、我々の為、態々お迎え賜りまして本当に有難うございました」

陸軍士官学校に入校してから最後の敬礼に至るまで、十七年の月日が流れていた。

時代を感じさせる見慣れない語句や、軍隊独自の専門用語もあり、私は十日を要して窓辺の椅子

から義父の足跡を一文字ずつ辿った。とうとう、最終ページまで指が導いた。

〈あとがき〉の締めくくりには、こう記されてあった。

来るべき二十一世紀こそ、人類が仲良く助けあって素晴らしい世紀になることを祈念して、私の拙い自分史を閉じる次第です。

手に取ってくれた方々の、ご健闘を祈る。

私はしばし眼を瞑った。いかにも感嘆を装った言葉の並列は避けるべきだと思った。記されていた歳月を、その詳細を、ただ黙して受けとめることが、私にとっての最善だと実感した。小柄な一人の青年が、崩れゆく光に潰されず、底なしの虚無にも溺れなかったのは、将校だった誇りを捨てずにいたからかもしれない。軍人だった義父の影がこの一冊からすり抜けて、私の足許に冷たく濃く落ちてきた。沈思あるのみ――祈りを内包したちいさな言葉がふいに浮かび、揺蕩いながら音も立てずに私の胸底へ沈んでいった。

静かに閉じようとしたとき、本の喉と見返しの際に、鉛筆の薄くか細い縦書きが眼に入ってきた。義母の綴りだった。

稔さん、もう少し、少しでも、お話しを直接聴かせてほしかったです

平成二十年四月二十六日

義父の一周忌にあたる日付だった。義母は、何度この本に眼を通してきたのだろう。法要のあと、義母は、ひとりになった部屋でこの本を開いたのだろうか。義父と義母を繋いだ一冊から指先を離した。閉ざされていく乾いた紙音と鎮めた私の呼吸が、部屋の冴えた空気に融和しては透明に結ばれていった。

けれど、私は閉じた本を手にながら消化しきれていない自分を感じていた。自分史に記されているのは、あくまで史実のみだった。義父が、何を祈ってシベリアの空を仰いでいたか。困憊する身体を吹き抜けていく凍てた風に、何度嘆声を散らしてきたか。無事に帰還できたものの、宙吊りになった十一年の歳月をいかに捉えようとしていたかは、一文字も書かれてはいなかった。

ふと、自分史とともに並んでいたノートの存在を思いだした。確か、「自分史略年表」とタイトルされていたはずだった。自分史を書くための単なる執筆メモだと決めつけ、私は本にばかり気をつけていたが、メモだからこそ雑記されているかもしれない。急いで分厚い大学ノートを手のひらに収めた。ちいさく息を吐いてから、そつと表紙を捲った。一ページ目は、義父が生を受けた大正十一年から始まっていた。一年間を記載するのに見開き二ページを用い、どの年も縦には月を十二分割し、横は〈自分・家族・国内・世界〉と四項目に分けられていた。ざつと捲っていくと、全ページに定規を曲がらずにあて、丁寧な直線を引き、各々の欄を構えていた。よく尖った鉛筆で欄か

らはみださないう、年ごとに起こった出来事や事件、自分の学校や家庭での様子が記されていた。時には、義父の細い文字が思惟を簡潔に綴る場面もあった。私は、指を先へと急かした。昭和十四年のページからは、士官学校入校に際し意気揚々とした青年の姿が立ちあがってきた。昭和十六年十二月の真珠湾攻撃からは、士官としての戦闘態勢がつぶさに残されていた。よく憶えているものだど驚くほど詳細な記録だった。時代の緊張と自らの士気も高まるにつれ、個人的な感情は皆無になった。そして、昭和二十年。終戦を迎えラーダ収容所に移動した記載を最後に、義父が文字を落とした跡は残されていなかった。

自分史には、十一年間の生活が克明に綴られているから、記憶していないわけではない。義父によって隠された自身の時間が、白いページの黒い枠組みを透明でくぐっていた。何も書かれていないと判りながら、私はもう一度昭和二十年までページを戻してから、表面的には無機質になった一年をゆっくりと追った。追うごとに、捉えることのできない深みが私に向かってくる錯覚を覚えた。ふたたび義父の文字が現れたのは、昭和三十一年十二月二十一日だった。

十二月二十一日

日ソ交渉の結果、期限前釈放　ハバロフスク出発

十二月二十六日

舞鶴港上陸　同日復員

十二月三十一日

札幌着 帰宅

この日を書き残すことで、陸軍士官としての終止符を打ちたかったのか。ここからまた始めようとする決意の表れだったのか。いずれにしても、十一年間をあえて封閉した事実には、義父の堅固な意志とそれを貫く姿勢を穿ち得たように思った。自ら経験した残酷を、悲哀を、虚無を、戦慄を、そして憤りを、言葉で表意しきれなかったのか。昭和二十一年から続くページを捲れば捲るほど、そこには底なしの空洞が広がるばかりで、こぼれ落ちる何もものも残っていないかったのか。それとも、言葉のちからを借りた瞬間から、義父の真実は純度を欠き、類似の域に埋没してしまうと思ったのかも。近似値でしか描ききれない言葉には頼りたくないとする、つよくしなやかな抗いだったのかもしれない。

胸奥に置かれたままの義父の本意には、とうとう指の尖端すら触れることはできなかった。だが、歴史の一証人として私たち家族に敷衍すべき使命感が、義父にはあった。受けとめてもらいたい希みも潜在していた。蠢く感情は貌にしないまま沈ませ、史実だけを言葉に恃んだのではないか。自伝とノートを膝の上に重ねた私は、孤独な思索と浅い想像を、同心円を描くように違わない軌道で何度も巡らせていた。

結局、あのスプーンだけが、時代に屈しなかった義父の息遣いを繊細に感受していたのだろう。

だからこそ、戦禍の日日が歳月に圧されてしまっても、絶えず自分の視界に留めていたのかもしれない。

もう誰も使わなくなった箸立てから、私は変わらずに直立しているスプーンを抜きだした。久しぶりに触れる金属の冷たさが、右手の皮膜をくぐり、内側までゆっくりと伝っていった。冷たさのなかに懐かしさを憶えた指先で握りなおし、傷だらけのスプーンを窓にかざしてみた。曇りのない硝子に透かされる一本は、使命を果たし終えた誇りを、そのゆるやかな反りに包んでいた。冬の陽が淡く射し込んでくる。凍てた細い光を、歪まない筋にして乗せる柄の裏は、いかなる時も昂然と伸ばそうとしていた義父の背に、どこか似ていた。

いずこよりいずこへ（旭川編）

津坂 格

〔前号第七章までのあらまし〕

昭和十三年二月四日、名寄町高台に住む貧乏農家の娘平岡ノリコ（十九歳）は酪連バター工場に勤める高屋敷勲（二十二歳）との祝言を中愛別の勲の実家で挙げた。勲は渚滑（紋別）に新設された酪連のバター工場に転勤が決まっています、新婚生活を渚滑の社宅で始めることも決まっていた。ところが、この一週間後に召集令状が届き、勲はこの十五日に旭川の第七師団歩兵第二十八連隊

に入営し、ノリコはそのまま高屋敷家で農作業を手伝いながら勲の帰りを待つ身となった。

その直後、第七師団に満州への派遣命令が下った。チチハルに駐屯した。勲とは手紙やハガキで消息を交わしていたが、一年ほど過ぎた六月からばったりと絶えた。実は、昭和十四年五月に起きたいわゆるノモンハン事件で、勲が所属する歩兵第二十八連隊第二大隊（梶川部隊）は戦場に応急派兵されていたのだ。同年八月二十日から始まったソ連軍の大規模包囲作戦で日本軍陣地は総崩れとなった。ノロ高地で守備についていた梶川部隊も完全に包囲された。二十三日、勲は敵の砲撃で戦死した。

その後もノリコは高屋敷家で暮らした。姑から勲の兄である理との再婚を勧められたが、どうしても受け入れられず、いつまでもこの家にいることもできないと思うようになった。

そうした折に祖母カノから再婚の話が持ち込まれた。相手方は妻に死なれた人で二歳になった女兒がいるが、その養育を覚悟のうえなら、相手の人柄などは心配いらぬという話だった。ノリコはカノに任せることにした。その相手というのは、これまで親戚付き合いはなかったが、自分の生母コキヌとはいとこの関係にある田辺正人だった。勲が第七師団に入営する日に、旭川の田辺家で紹介されてはじめて顔を合わせた人だったのだ。

昭和十五年一月十五日の朝が来た。高屋敷家の慣わしである朝のお参りに、ノリコはいつものように皆と仏壇に向かい手を合わせた。昨晩は一人で勲との思い出に耽りながらの別れの挨拶を済ませていたので、今朝は心の中で、「勲さん、ありがとうございました」と、一言つぶやくだけにした。昨晩と違い、今朝は感傷めいた気持ちに陥らずに済んだ。

朝の食卓には赤飯が並べられた。ノリコへの祝意を表すものだった。

家族そろっての食事も終わり、一通りの挨拶も済ませて、いよいよ高屋敷の家を出ようとしたとき、

「ノリコおばちゃん行ったらだめだ」

小学一年生の登がノリコの足元にしがみついた。

「登ちゃん、また来るからね」

ノリコは言ったものの、高屋敷家の人々がこれまで親切にしてくれたことへの思いが一挙に湧き起こり、胸が熱くなった。

家の前には馬そりが用意されていた。同行してくれる兄嫁ウタとともに馬そりに乗り込んだ。手綱は義兄賢が引いた。

駅に向かう馬そりからは石垣山が目の前に見えて、勲の出征中、中愛別青年団の人々などと皆で

登って楽しかったことが幻を見るかのように思い出された。

中愛別駅に着き、賢は二人を降ろすと、一旦引き上げた。あらためて出掛けてくるということであつた。

ノリコはウタに伴われて旭川とは逆方向の上川村に向かった。

ウタが利用している上川駅前の髪結いでノリコは花嫁姿になった。ウタも髪を整えてもらった。

ノリコとウタは午後一番の上り列車に乗車した。

中愛別駅から賢が袴姿で予定どおり乗り込んだ。

ノリコの花嫁姿を見て、

「おお……」

賢が声を立てた。

ウタは笑いながら賢に聞かせた。

「旭川の芸者衆にも負けない女振りですよ、って髪結いさんに言われたのよ」

賢は髪結いがノリコを称えてそう言ったのか、それとも自分の腕を自慢しているのか、真意がつきかねたが、妻に問い返すのをためらった。

ノリコにとっては、髪結いのこの言葉は物悲しかった。小学生のときのことか思い出されたからだ。若い女の人が学校にやってきて帳面と鉛筆を渡しながら、「今度、旭川に行くことになったのよ、ノリちゃん元気だね」と言い残して去っていった。きれいな和服を着ていて白粉の匂いがした。

今思えば、その人というのは、まだ自分が物心も付かない頃に母のコキヌと離婚し、若死にした父親に身近な人であつたに違いない。旭川の芸者になるということで、別れを告げるために会いにきたのであろう。

列車がよいよ動き出すと、ノリコはこれが中愛別との別れかと思い、胸が詰まった。二年前、高屋敷家の嫁になるときは旭川で花嫁姿になって下りの列車でここに降りたが、今また花嫁姿ながら今度は上りの列車で旭川に後戻りする。何という巡り合わせなのだろう。あつという間の二年でありながら、ずいぶんといろんなことがあつた二年間でもあつた。

旭川駅からはタクシーで二条通十二丁目に向かった。

二年前も寒い日に、勲に伴われ歩いてここに来たはずなのに、ノリコにはその印象は薄かった。勲の入営前に田辺家を訪れて挨拶を交わすことは考えてもいなかったことだし、自分としては入営前の限られた時間こそが大切に、田辺家へ寄り道するのは貴重な時間の無駄使用のように思っていたからだ。

祝言は田辺猛四郎家宅の離れで行われた。お互いが再婚ということもあつて、媒酌人は立てないで、出席者もごくごく内輪だけに絞られたものだった。田辺家側は三名、高屋敷家側も三名だった。一心、神前結婚式ということで神主に来宅してもらい、夫婦の誓いは済ませた。

神主が帰ると、祝宴の席が整えられた。上座に正人とノリコが並んで座り、出席者はお互い向か

い合わせに並んだ。新郎側の一行は、正人の実父田辺一輔、叔父の猛四郎、ウメの順に座り、新婦側は古木カノ、高屋敷賢、ウタの順に座った。

実は、もう一人、この場に臨席すべき男がいた。元々は一輔の五男すなわち正人の実弟であったが、子どもにも恵まれなかった猛四郎が養子として迎入れていた清人である。いずれはこの田辺商会を引き継ぐ。清人は昭和十二年一月に第七師団へ現役入隊し、やはり満州チチハルに出征していたが、ノモンハン事件が始まる前に転属命令で中国戦線に移っていた。その戦闘で右背貫通銃創の負傷を受け、現在は札幌陸軍病院に入院中であつた。

この家の主ということで、猛四郎が進行役をかねて簡単な挨拶をし、宴に入ろうとしたところで、賢は懐から小さな紙包みを取り出して口を開いた。

「これをどうぞ収めください」

恭しく初対面の猛四郎の前に押し出した。賢がこうした行動に出たのには、理由があつた。猛四郎の吝嗇ぶりをかねて耳にしていたからだ。

「結納とか、そのお返しといったことは省くことで話を通していたはず、こんなことはよしていたきたい」

猛四郎が受領を拒んだ。

「いや、これはノリコさんが中愛別で働いたものなので、田辺家様にお渡しておくべきものとして持参したものの、どうかお受け取りをいただきたい」

と返したが、猛四郎も再度拒み、三度、四度と押し問答が続いた。

「正人がいづれ実家に戻るときには、千両箱を持たせてやるのだから、御心配は無用」

猛四郎が言い張って、場の空気が険しくなった。

カノが堪えきれないように口を開いた。

「いつまでもこんな話をしていてもしょうがない。猛四郎、高屋敷さんがノリコのことを思っ
てつかく持参したものだ、高屋敷さんの心遣いをむげに断ることは礼に背くことにもなろう。その
気を汲み取って半分だけ田辺家としていただくことにしてはどうじゃ」

猛四郎は黙った。

今まで黙っていた一輔が発言した。

「姉貴の言うとおりにしといたらいんじゃ」

カノは一輔より二歳半年上であり、猛四郎より八歳年上なのだ。カノはこのところ猛四郎の家で
家事手伝いということをやっかいいになっていることも多かったが、こういう場となると姉という存
在の発言は重い。羽振りのいい猛四郎ではあったが、姉の物言いに抗うことはなるべく避けたかっ
た。何たって、はな垂れ小僧の頃は姉の背中育てられたようなものなのだ。

カノは左側に座っている賢に顔を向け、

「そういうことで……」

カノは賢に小声で訊ね、賢もまた小声で答えた。

「そりゃ、ノリコには身に余るお金じゃ」

猛四郎は向かい席の賢がカノに小声で言っていた話を素知らぬ顔で耳にしていた。考えれば、おれの面目は潰れずに済むと胸算用を立てることができた。

「これは、おれが一応預かっておくとということにさせてくれ」

と、猛四郎が引き取った。

結局、中を取ることでこの場を収めることになり、結果として猛四郎に五〇〇円の紙包みが賢から渡された。

ノリコは口を挟める立場でもなく、黙ってこの場の遣り取りを聴いていたが、この田辺家というのは何かにつけ波風の多い親族ではなからうか、と思わずにはいられなかった。

そこに膳を運びに三人の女性が入ってきた。三人ともノリコと同じ年格好であった。

猛四郎は自分に一番近くにいた女性を、

「これが、まだ正式に籍は入れていないが、跡取り息子清人の女房となるトミだ」と、紹介した。

「中浜トミでございます」

「お世話になります、ノリコと申します」

トミとノリコは応えた。

「次が檜山芳子で、その次が早坂科恵（しなえ）で、実はこの科恵は……」
猛四郎が話し掛けたところを、ウメが制して口を挟んだ。

「芳子さんと科恵には、ちょうど二年前にノリコさんは会っていらしゃるのよ。高屋敷さんが師団に入営される日にわざわざ挨拶にみえられて、あなたはどこに出掛けていたのか、留守だったけど……」

と、猛四郎に顔を向けた。

「ここに、作蔵と聡をちょっと呼んでこい」

猛四郎が誰とはなしに言うのと、科恵が黙って部屋を出た。

「勲がこちらに来ていましたか」

賢が問い、

「実は、その折はわたしも勲さんに会っています」

正人が答えた。

「それは知らなかったが、これも何かの縁というものじゃ」

と、猛四郎は話を続けた。

ややあって二人の若い男が部屋に入ると、

「この三つ揃いの背の高いのが馬場作蔵という者で、四国高松の実業学校を出ていて、簿記なんかはお手の内だ。隣の学生服を着ているのが原聡だ。作蔵はわしの甥で、聡というは高松にいる姪の

嫁ぎ先の息子だ。いずれにせよ、ここで修業させたうちは、それぞれ独立させてやるつもりだ」

と、猛四郎は胸を張った。この家で働く男をノリコに紹介しているというよりは、この宴席に座る者に自慢話を披露しているようにしか聞こえてこない。

宴が始まってからは各人機嫌がよかった。

妻に死別された男と夫に戦死された嫁という二つの難題が一挙に解決されたわけなのだ。

「この邸宅の敷地面積はいかほどで？」

賢が問うと、

「ここは一六〇坪で本店だが、ここから一〇〇メートル離れた所に支店を置いていて、ここは正人が店長をしている。今はどうにか一人前になっておる」

猛四郎がこれも自慢たらしく答えた。

一輔も上機嫌だった。話によれば、今度の嫁は体が丈夫で働き者らしいからだ。あとは一日も早く息子と一緒に東俱知安に来てくれさえすればいい。

座は和んで盛り上がった。

カノも肩の荷が下りてほっとしていた。自分がどうしてもしなければならぬと思っていたノリコの再婚が実現できたからだ。自分がどうしてもしなければならぬと思っていたノリ

「これでおらも安心だ。名寄は引き払って、長男の所に身を寄せることにしたんじや。これがおらの潮時というものだ」

自分の身の振り方を語った。

「吉彦は今どこか」

猛四郎が訊いた。

「札幌の奥の定山溪で、造材をやっているな」

ノリコもはじめて耳にすることだった。

この叔父とは年が離れていて、しかも早くから名寄を離れ、馴染みがなかった。眉間にしわを寄せた陰気な感じの目付きのきついおじさんという、小さい頃の印象しかなかった。次男の昌彦叔父は何かと世話好きだが、今は樺太にいて遠いのでカノおばあちゃんは長男の方に身を振ったのだろうと思った。

*

田辺商会は商売が繁昌していた。五、六軒離れた場所に支店があつて、たしかに正人はその支店長であつた。だが、支店長といつても名目上の支店長であつて、経営を任されていたわけではなかつた。正人はこの支店で従業員三、四人で切り盛りしていたが、毎日店を閉めた後は売上帳簿と売上金を猛四郎にそのまま渡していた。猛四郎は本店と支店の売上高を比較させ、お互いを競わしていた。

しかも、正人はこの田辺商会で働くようになって以来、先妻花恵と結婚後も、この猛四郎宅に住み込みを続けていた。花恵というのはウメが自分の故郷山形県東田川郡から家事手伝いとして引き寄せた姪で、その花恵が出産後の体調を損ねていたからだ。いずれ正人は東俱知安の実家に帰ることになるといった事情もあった。それに正人がこの家を離れられない決定的な理由があった。恵子は生まれてからずっとこれまでウメと科恵が母親に代わってここまで育ててくれたからだ。恵子は猛四郎からみれば甥の子であり、ウメからみれば姪の子であった。しかも叔父夫婦には子どもが授けられず、恵子を我が子とも、我が孫とも思うほどに溺愛していた。実際、正人から見ても叔父叔母は花恵を大事にしてくれていることは事実だった。すっかり情が移ってしまい、恵子を手元から離せなくなっていたのだ。

ノリコは戸惑いを感じていた。わたしが正人と結婚することになったのは、二歳半に満たぬ恵子の母親となるということが条件だったはずだが、依然として恵子は離れの方にあるウメの部屋で寝起きした。そこに科恵が子守役で恵子の側に添う。もともと正人に与えられていた部屋は店舗に隣接する八畳間だったので、ノリコもこの部屋に入る。つまり、一軒の家の中で親子別居生活だ。

このことでウメが言うことは、「恵子は神経過敏な子なので、急に部屋を変えるのは体調を崩すからもう少し気候がよくなるまで待った方がいい」という理由だった。

そうした事情から、ノリコもまたこの家で店の仕事や家事の手伝いをしながら他の店員とともに暮らすことになった。ノリコにとって、商いの仕事ははじめて手掛けることで戸惑うことが多かつ

た。お客さんとの接し方、帳簿の付け方、そろばんの使い方などを覚えなければならぬと思ったが、皆それぞれの持ち分の仕事があつて忙しそうで、教えてもらうのも気が引けた。家事の方の仕事となると、同じ年頃の女性たちの仕事だが、あちこちの親戚縁者から寄せ集められたといった感じで、高屋敷家のような一体的な親密さはなかった。

ノリコは今の自分が居候の身であり、ウメや科恵の手から強引に恵子を奪い取るような行動に出ることも憚られた。何となく右往左往して、これといってまとまった仕事をすることもなく、すつきりしない日々だった。

*

その矢先の一月二十六日夕刻に訃報が届いた。古木家の長男吉彦が事故で死亡というものだった。その後、死亡の詳しい情報が入ってきた。吉彦は夏の期間は製材工場で働き、雪が降ると定山溪の奥地に入って木材を切り出し、運搬する仕事をしてきた。一昨日のこと、切り倒した大木を積雪を利用して崖上から下の雪道に滑り落とす「木落し」という作業中に大きな丸太が横に逸れて転がり落ち、その下敷きとなった。意識不明の重傷であったのを仲間の手で病院に運び込まれたが、昏睡状態が続き、ついに回復することなく、二十六日夕方に医師から死亡が告げられたという。働き盛りの四十歳だった。

葬儀は、定山溪錦橋の自宅すなわち藤野木工場社宅にて二十七日六時通夜、二十八日十時告別式、十一時出棺という日程だった。喪主は妻の美代。

吉彦の一番近い親族は、今は樺太の敷香（しすか、ポロナイスク）にいる実弟の昌彦であった。

二十四日夕刻の危篤を知らせる電報に、折り返して明朝七時三十分の列車でこちらを発つとの返電があったという。

猛四郎は正人とノリコに、

「おまえたちは、そういえばまだ新婚旅行はしていなかったなあ」

と、前置きして、

「香典は出してやるから、吉彦の葬儀に行つてこい。ついでに定山溪の温泉にでも入れば、ちょうどいい新婚旅行になるぞ」

恩義がましく言った。

たしかにノリコにとって正人とははじめての旅行であったが、何よりもカノおばあちゃんのが気掛かりだった。

ノリコが正人と再婚して間もなく、カノは老後は長男のもとで暮らすのだと長年住み慣れた名寄の家を片付けて身を寄せたばかりなのだ。

正人とノリコは二十七日八時発の列車に乗り込み、苗穂駅で下車した。ここで定山溪鉄道に乗り

換え錦橋には正午半に着くことができた。

葬儀の諸準備は喪主美代の実家である札幌の内海家両親と藤野木工場社員の手で執り仕切られていた。

案の定、カノおばあちゃんはすっかり気落ちしていた。体が一回り小さくなったように見えた。尾羽を打ち枯らすという言葉がノリコの胸の中を掠めた。

古木家側としては昌彦の到着が待たれた。正人が時刻表をあちこちめくって調べてみたが、北緯五〇度の樺太国境に程近い敷香からここに駆け付けるには、まず列車で大泊まで南下し、ここから連絡船で稚内の上陸して来なければならぬのだ。大泊港と稚内港を結ぶ航路は一日一回正午発で、翌日朝八時に到着する。敷香から小樽に直行する航路もあったが、これは毎週土曜日の出港で翌々日の朝八時の到着でかえって遅くなってしまう。

通夜にはどうしても間に合いそうもない。

ノリコと正人は隣の社宅が空いていたので、布団を借りて過ごした。

翌朝の告別式にも昌彦は姿も見せなかった。やはり、交通事情が許されなかったのだ。

昔から子に先立たれた親は野辺の送りをしないものだと言って、十一時の出棺にカノおばあちゃんも娘の骨拾いに高台の火葬場に行ったはずだがと自分の記憶を探り出しながら、ノリコはいぶかった。

ノリコはここにカノおばあちゃんを一人にして置くことはできないと思い、豊平の札幌共同火葬場には正人一人で一行に加わってもらい、自分はカノおばあちゃんと一緒に残ることにした。

ノリコがカノおばあちゃんと二人きりになったところで、

「気を落とさないで、体を大切にしてください」

気遣うと、

「ここにいろのがつらくてのう。ババが死に神を背負って舞い込んできたと言いとるんじゃ、嫁が実家の親にな」

悔し涙混じりに打ち明けた。ノリコはかわいそうに思った。こんな弱音を吐くカノおばあちゃんを目にしたこともなく、急に老け込んだように見えた。カノおばあちゃんは還暦だった。ちよっと前までは、孫娘のことになると、あんなに強気だったのに自分自身のことではすっかり落ち込んでいる。そうした姿を前にして、ノリコは再婚にあたって恵子の養育についてあれだけ念を押されていたにもかかわらず、自分が恵子にいまだに母親としての役割を満足に果たせないでいる有り様を口に出せなかった。

「ごめんください」

聞き覚えのある男の声で、ノリコが玄関に出てみると、待ち望んでいた叔父古木昌彦の姿があった。

ノリコにとって、昌彦が名寄中学校を卒業して以来の再会なので、十三年ぶりとなった。挨拶も

そこそこに、今少し前に棺を出したばかり、行き違いになっている状況や火葬場の場所を伝えると、昌彦はカノと短い言葉を交わし、「兄貴の骨は自分が拾わなければならない」と、取って返した。三十二歳になっていた昌彦の顔を見て、カノおばちゃんはいくらか落ち着きを取り戻した様子だった。正直なところほっとした。今まで古木家側として内海家側に肩身が狭い思いをしていたが、面目が立ったように思えた。

野辺送りの一行が錦橋の社宅に帰って来た。

昌彦も一行ともども戻ってきた。

ノリコは昌彦から、「火葬炉に入れられる前に着き、兄貴の最後の顔を見ることができた」と聞かされてほっとした。危篤の電報を受け、はるばる樺太の国境に程近い敷香から昼夜の強行でやって来たかいがあったというものだ。

昌彦がノリコに小声で話し掛けた。

「おれは宗教にこだわる方ではないが、古木家というのは天理教のほずで、親父はかなり信心家であつかったように思っていたがな」

葬儀が仏式で執り行われていること触れた。

ノリコがここに来たときはすでに葬儀の準備はできていた。

「内海家が懇意にしているお寺さんに来てもらったんじゃないかしら」

「まあ、お袋もここに来たばかりで、知っている教会の人もいなかっただろうしな」と、昌彦はうなずいた。
ノリコも、「パパが死に神を背負って舞い込んできた」と噂されている状況を昌彦に面と向かっては言えなかった。

昌彦はカノやノリコを前に樺太鉄道勤務や樺太の土地柄や結婚後も子どもがいないなどの身辺を語った。

正人は今日が初対面であったが、

「樺太の落合に住む姉の夫が世話してくれて、樺太で一時働いたことがありました」と、自分の体験を話した。

「その人は市瀬さんかね？ 市瀬さんならよく往き来しているね」

「今も、姉の家にはサガレン三号というカラフト犬が元気でいますか」

「うん、今飼っているのは、サガレン五号という仔犬がいるね」と、話の輪が繋がった。

骨揚げ法要も終わり、一連の葬儀が終了すると、内海家からの持ち掛けで家族会議を持つことになった。

この吉彦には病死した最初の妻ハルミとの間にランドセルを背負う十歳の秀彦がいて、後妻美代との間にはまだよちよち歩き孝彦がいた。

美代は淡々と、

「吉彦との間に生まれたわたしの息子の孝彦は、自分が連れて古木家を出ることにいたしました」と言い、続いて美代の父親が、

「そんなわけで、後のことは古木家の方にお任せしますので、よろしくお願ひします」

内海家側からの一方的な申し入れだった。昌彦は、「お任せします」という言葉はこういうときに使うものかと半ば感心しながら聞いていたが、兄が死亡していた場合は、その心づもりでここに来ていたところだった。

実弟昌彦が母カノと兄の長男秀彦を引き取ることがだちに決まり、吉彦の骨は樺太に帰る途中に名寄に立ち寄り、高台の墓地に建つ古木家の墓に納めて樺太に戻るということになった。

ノリコにとっても、寂しいことだった。カノおばあちゃんは自分が困ったときにいつも陰日向になつてかばってくれたものだったが、これからはそうしたことも樺太では無理だ。自分はいよいよ独り立ちして生きていかなければならないのだと覚悟があらたになった。

結局、定山溪の温泉に入ることなく、旭川に戻ることにした。気持ちとして温泉気分にはなれなかった。ノリコも正人も口には出さなかったが、家族がバラバラになる一家離散は、人ごとでは済ませることではなかった。

*

ノリコが旭川に戻って数日のこと、小包が配達された。何やら古ぼけた包みだった。小包にはなぜか差出人の名前や住所はなかったが、宛先はたしかに田辺ノリコと記されている。誰が送って来たものかと思ひながら包装紙を解き始めたが、その下もラクダ色の包装紙でしかも全体に糊付けされていた。嚴重にきつく荷造りされたものだった。

中を開けた一瞬、ぞっとした。ドス黒く変色しているが血糊だと一目で見取れた。その布を恐る恐る手に取ってみると、小麦粉のようなやわらかい砂がパタパタと落ちた。なんと、よく見ると、勲に持たせた千人針だったのだ。何度も、何度も汗にまみれたのか布全体が黄っほくなっていたが、まさしく見覚えのあるものであり、勲の千人針に間違いはなかった。ほとんどを自分が徹夜で縫い上げたものなのだ。姑から渡された四銭と九銭の硬貨も自分が縫い付けたものだ。

この田辺の家に来て何日も経っていないというのに、送り主はどうして自分の住所が分かったのだろうか、不思議でならなかった。同時に、最後に見送った勲の背中が目に浮かぶとともに正人は何とも申し訳ないような気持ちにもなった。

夜になって正人が帰宅し、見せて事情を話すと、

「これはやはり、まずは高屋敷家で供養してもらった方がいいだろう」

腕を組んで言い、

「送り主に心当たりはないのか」

と、正人も不思議がった。

「高屋敷家の墓に納めるのが一番なんだろうなあ」

つぶやくようにノリコに言った。

ノリコは高屋敷家にいたときに喉仏を届けてくれた、片腕のない青年を思い出した。この千人針もその筋からかもしれないと頭をふと掠めたが、確証は掴みようもなかった。

翌日、早速ノリコは高屋敷家を訪れた。玄関に出てきたのは、ウタだった。

先達ての祝言のお礼をまず述べ、次いで、

「ちよつと、見てもらいたいものがある……」

と、物言うノリコの顔を見て、

「賢は会議で出掛けているけど、姑ならいる」

ウタは何やら只事ではないものを感じ取って言った。

ノリコは姑のタカとウタに事情を話し、目の前で包みを広げて千人針を見せた。

つと、タカは千人針を両手で掴み、胸にかき抱くと、

「勲が家に帰って来たんだ、帰って来たんだ」

叫ぶようにそれだけ言い、大きな目から大きな涙を溢れさせた。

「勲はどんなにこの家に帰って来たかったのか、その思いが通じたんじゃ」

と言ったものの、後はしばらく言葉にならなかった。

ウタも無言のままだった。

日頃は気丈なタカの姿しか知らないノリコにとっては、姑が嫁の目の前で感情を抑えきれないでいる様子は意外だった。

ややあって、

「これはおらがもらっておいていいのかよ？」

タカが問う、問うというよりは、それは哀願だった。

ノリコは正人が言うようにこの千人針は高屋敷家に納めるつもりで持参したものであったので異存はなかったが、たとえ気持ちが変わって持ち帰りたいと思っても、今のタカを見ていると、それはとても口に出せることではなかった。

ともかく、まずは仏壇に供え、三人で冥福を祈った。

帰りしなに、ノリコはウタから田辺家の様子を訊かれたが、口を開けば愚痴めいたものになりそうで言葉を濁した。泊まっていけば……と誘われたが、高屋敷家を後にすることにした。

旭川に戻る車中も、ノリコはタカの目から溢れ出た涙が頭から離れなかった。勲の戦死内報を受けたときもタカは今日のように大粒の涙を溢れさせたのであろうか、と思った。その記憶はノリコ

にはなかった。そのときは自分が自失となっていた。姑もやはり悲嘆に暮れていたに違いないのだが、自分はそうした姑に気が付かなかっただけのことだったとノリコは今になって知った。

ノリコは昨日のことを思い返した。自分は千人針を目にした一瞬、悲しみよりは不気味さであった。それから誰が自分の住所を探り当てて送ってきたかといういぶかしい気持ちになった。次は、勲が戦死して早々と再婚したということが無言のうちに咎める意味で送り付けてきたものではないのかという疑心暗鬼になった。そのときの自分の疎ましいような、いやらしいような心理になったことを思い知らされた。それに比べ、姑は息子が戦死したという事実よりも自分の家に息子が帰宅したんだということに胸を詰まらせていた。そのことを嫁である自分を目の前にして二度も三度も口にしていった。後は傍目もかまわずに泣き崩れていた。

その姑の姿に先達て目にしたばかりのカノおばあちゃんの姿が重なった。陰日向なく自分をかばってくれていた人、落ち込んでいた自分を叱咤して励ましてくれた人。老後の暮らしを託するはずの長男の急死ですっかり老け込んだカノおばあちゃん。そして、戻ってきた千人針を両手でしっかりと握りしめて放そうともせずに嗚咽する姑、カノおばあちゃんより四つ上の六十四歳だ。やはり年老いて涙もろくなつたのだ。これまでは気丈な姿しか見せていなかった二人がそろってどこかに消えてしまっていた。これからは自分が先頭に立って歩んでいかなければならない年齢になったのだ、とノリコはしみじみ思った。

*

離れで一人夕食を取る猛四郎の膳をノリコが下げに行くと、猛四郎が、

「この夕飯の盛り付けをしたのは誰だ？」

と、口を開いた。

ノリコは盛り付けに何か落ち度があったのかとひやっとして、

「わたしですが、何か」

「うむ、ノリコか。このホウレンソウ、だし汁の掛け方おおいによろしい。だし汁が足らなくてせつかくのお浸しの味を台無しにしてるのや、そうかといえは、だぶだぶと掛けて小皿の底にだし汁を溜まらせていたりする者がいるが、おまえの掛け方は過不足なく、ちょうどいい」

ノリコがほっとして聞いていると、

「ここに座れ」

膳の前を猛四郎が指差した。

「何事もこうでなくてはならぬ。おまえが商売をすれば、きつと金を貯めることができる」
断言口調で言った。それから猛四郎はやや前屈みになって、

「どうだ、この暮らしは？」

「わたしは農家育ちで畑や田んぼの仕事ならできますが、このような商いは……」

ノリコが口ごもると、

「いや、おまえにここで商売の仕事をしろ、と言うつもりはない。正（まさ）はまじめな男だけど世事をうまく処理する要領はいいとは言えない。おまえが正を助けて物事が何かと円満にいくようにしなければならんぞ」

一息を入れ、

「おまえのところにも、東俱知安から手紙が来ているだろうが、兄貴がうるさいんだ、早く帰せ、とな。おまえはまだ行ったことがないから分らんだろうが、あんなところに恵子をやるのが不憫でならんのだ」

話は恵子のことになった。猛四郎が自分を呼び止めたのは、恵子のことわたしを通じて正人を牽制させるつもりなのだ。ノリコは気が付いた。

「恵子はわたしが育てるといふ、正人との約束で、嫁に来ました」

「まだ赤ん坊みたいな恵子をあそこにやるのは、まだ早い。今までウメや科恵が手塩をかけて面倒を見てきたが、それもできなくなる。小学校に入るまではここで育ててやらなけりゃ、恵子がかわいそうだ」

「子どもは、親が育てるのが一番だと思います」

「だから、東俱知安に戻るのには、今しばらく待った方がいいと言っているんだ。だいたい、あそこをばばは子どもを育てた経験がないというじゃないか、よくよく考えてみる。いいか、おまえにも、

いずれ自分の子どもができる。何たって、自分の子どもが一番かわいい」

「恵子は父親の正人のもとで育てられるのが、一番幸せです」

「陰ではおれを種なしスイカと言っている、最初の女房にも、今のウメにも子どもはできなかったからな。だから、おれにとっても、ウメにとっても恵子は神様が授けたものだと思っている」

「トミさんがいらっしやるではないですか」

「うぬ、おまえだけに言うが、実は、おれもウメも清人と科恵とが結婚をして恵子を育ててくれることを望んでいた。だが、清人はトミを選んでしまったんだ。ウメがすっかり落胆してなあ。ノリコ、そのところを察してくれ」

ノリコは困惑し、言いようがなかった。

猛四郎は一方的に自分の考えを述べ立てたうえで、

「もう膳は下げていいぞ」

と、話を切り上げた。

これは容易なことでは済まないとノリコは思った。

ノリコが浮かぬ顔をして台所に戻ると、芳子とトミが待っていた。

「気にしない、気にしない」

六カ月年長の芳子がノリコに向かって声を掛けた。芳子はこの正月に実家のある岩見沢に帰った折にお見合いをし、春には祝言を挙げる事が決まっています、気楽な身分になっていました。

「そうよ、舅さんはチビリ、チビリやりながらお説教を垂れるのが趣味なのよ、殊にわたしたち若くて美しい女性には……」

一つ年下のトミがお猪口を口に運ぶ仕草を真似しながら笑い声で言い、芳子もつられて声を立てて笑った。

ノリコは、笑えなかった。

二人が自分を心配して話し掛けてくれたことは分かったが、恵子の件で時間を費やすことになったと思ひ巡らせているわけではないのだ。後片付けが遅くなってしまったことに「ごめんさいね」と一言ことわり、ノリコは深入りするのを避けた。

だし汁をケチったり、だぶだぶと掛けたりすると猛四郎が言っていたが、それは猛四郎に対するいやがせだったのではないのか、とふと思った。

東俱知安の田辺一輔から今また催促がきた。一刻も早くこちらに帰ってくるようにとのことだった。年寄り二人で働くのは身が持たないから、そちらの方は片付けてこっちに来て、早速に家業を継げという文面だった。

正人もいよいよ覚悟を決めた。

ノリコは、「二人そろって、叔父にこの際頭を下げて認めてもらおう」と正人から言われ、いやな予感がした。数日前に猛四郎から正人をなだめろという意味のことを言い付けされて、正人には

それとなくほのめかすように言っではあったが、正人は猛四郎の本心まで見抜けていないおそれがあったからだ。

翌日、猛四郎が夕食を終え、膳が下げられた後を見計らって、ノリコは正人に伴われ、猛四郎の前に居住まいを正した。

正人が猛四郎に一輔の手紙を見てもらいながら、

「一家三人お世話になってきましたが、前にも話していたように実家の方の事情から、東俱知安に帰らなければならない……」

話を仕掛けた矢先を遮るように、

「そんなに帰る、帰るといふならおまえたちは帰ってもいいが、恵子は置いて行け、そうでないなら、帰ることは許さん」

猛四郎は厳しい顔になって言い、手にしていた手紙を正人に投げ返した。

「いいか、恵子はウメがいたから育つたのだ。おまえたちはその恩も忘れて帰るとは何事だ」

今度はノリコに怒りの目を向けた。

先日の説得口調とは一変した態度だった。説得がうまくいかないとみて、力で捻じ伏せるやり方に切り替えてきた、とノリコは思った。ノリコはそう言われても我が子を親が育てるのに越したことはない、と反発を覚えたが、口に出して言えないでいた。そうしたノリコの気持ちを察してか、

「我が子とともに生活するため後添を迎える決心を固め、ノリコを娶った以上、恵子をこのまま旭川に置いて我が家に戻ることはできません」

正人がきつい口調で反論した。

「なに！ このおれの恩を裏切るのか！」

息を切って、

「兄貴が小樽でうどん工場が破産してにっちもさっちもいかないさなか、おまえの兄の信人が先生になりたいというので、ここから師範学校に通わせてやったし、小学校前の清人を引き取って育てたのは、誰だった思っってそんな口を利けるのか！ 恩知らずめが」

正人は猛四郎に顔を据えて、

「実の子を持ったことがない人間には、真の親心というものに理解が届かないのかもしれないが……」

猛四郎に聞こえるようにつぶやき、

「こんなことなら、ノリコをもらうのではなかった」

と、詰め寄った。

「いいではないか、ノリコは返せ！ ノリコは返せばいいんだ！」

猛四郎が家中聞こえるような大きな声で怒鳴ると同時にストーブの側にあったデレッキをわしづかみにして立ち上がり、正座している正人の肩にいきなりデレッキを振り下ろした。

ノリコは驚き、廊下に出て、

「誰か来て！」

店の方に向かって助けを求めて叫んだ。

馬場作蔵と原聡がすぐにやってきてくれて、

「まあ、まあ……」

年甲斐もない二人の間に割って入った。

猛四郎はなおも自分の我意と怒りを吐き出した。

「この恩知らずめが！ なんなら、清人の養子縁組も解消して東俱知安に帰してもいいんだぞ」

正人は正座のままうつむいてじっと堪えていた。

殴った方の猛四郎が息を荒く吐き出していた。

ノリコには猛四郎の目の色が狂気じみて見えた。

その夜、正人は床に入ると、

「かわいい気持ちはよく分かるが、金と力に任せて真の親心は解ってくれていない」

と嘆いた。それからしばらくして、

「余りになさけない」

悔し涙を拭った。

ノリコは何と言え方がいいのか慰めの言葉を見い出すことができなかつた。

ノリコもまた叔父たちが恵子を渡してくれないのは自分が信頼されていないのだと悔しかった。いつまでも寝付かれずに過ぎた。

翌朝、猛四郎との話し合いがもたれた。ウメも加わった。昨夜のような暴力沙汰になることを警戒したのであろう。

まずは、正人が猛四郎に昨夜の「実の子を持ったことがない人間には……」の発言に詫びを入れ、頭を下げた。

ウメが今まで正人の方にやっていた目をノリコに振り向けた。

ノリコは自分に投げ掛けてくるきつい視線を意識しながら口を開き、

「わたしは、一番下の弟が三歳で母親と死別した後、自分で弟を育てています。ですから自信があります、恵子の養育はわたしに任せてください」

息もつかずに訴えた。

ウメは黙って睨め付けたままだった。

ノリコにとって、ウメは勲との祝言で中愛別に赴く際にお世話になった人で、おっとりとしたお人好しのおばさんという印象だった。だが、実際に一家の中に入って暮らしてみれば、それは外面であったことに気付き始めていた。亭主関白の猛四郎を立てながら内では猛四郎を操っている。親

戚縁者とはいえ、人様の息子や娘たちを使用人としてさばくにはそれなりの宰領も身に付けていないことにはやってゆけないのであろう。どうして、どうして一筋縄ではないかない、したたかな人であったのだ。

ややあって、猛四郎がノリコに、

「おまえはまだ東俱知安の兄貴の家に行ったことがないからそう言うのだろうか」

と言いながら、正人に向かい、

「兄貴のあの家は、今のままではだめだぞ。正、おまえに二年の時間をやる。再来年の冬が来る前までに、恵子が凍えることのないように何とか家の中を整えなければいかん。その普請ができるまでは、恵子はここでおれたちが面倒を見る」

口をへの字にして言を切った。

正人には叔父が言った〈凍える〉という言葉に思い当たるものがあつた。小学生だった頃、おひつの凍える飯をへらで削り取って井に入れ、熱湯を注いで解きほぐした。とにかく胃袋に流し込んで、学校に出掛けたものだった。その記憶が正人の強気をひるませた。それに、〈二年〉と言う叔父の発言は、叔父の譲歩とも妥協とも受け取れるものだった。それに加え、猛四郎があくまで恵子連れ帰るなら清人との養子縁組は解消すると、昨夜言い出したことは正人にとって衝撃だったのだ。清人の将来までも台無しにすることは忍びがたかつたので、恵子はもう二年だけ叔父の手元に預けるという口約束でしかなかったが、折り合いを付ける頃合いだと判断せざるをえなかつた。

猛四郎は、正人の四年半に及ぶ奉公の報酬として、五〇〇円を渡し、鼻高々だった。「千両箱を持たせ、東俱知安に帰してやるのだ」ということだった。猛四郎が言う意味は、高屋敷からノリコに渡された分とを合算させての話なのだ。正人はこれを聞いて内心憤慨したが、一時的にせよこの家に預かることになった恵子のことを考えると、自分がずいぶんと安く見積もられた不満を表に出すことはできないと自分を押さえた。そう思いながらも、心の奥では悔しさと怒りをくすぶらせ、その感情が内攻し、自分の弱さに苦しんだ。

ノリコは正人の苦衷が手を取るように分かったが、どうしてやることもできなかった。

明朝の東俱知安行きを前にしてまたも眠れぬ夜であった。

編集室の窓明り



◇各作品の原稿（400字詰）枚数

「運転どうする？」

3枚

「オレンジ」

34枚

「SPOT」

62枚

「背筋」

29枚

「いずこよりいずこへ」

44枚

◇桃の花

目の前にある桃の花が昨晩より一段と増えている。可憐なつぼみが結構ついている枝を眺めるとまだまだ咲くだろうと気分がいい。

節分を過ぎた大安日に整えた雛人形。これまで二十八回飾ってきた。ぼんぼりの和紙がところどころ破れてしまっていることは三年ほど前からで、直そうと思いつながらもそのまま仕舞っていた。

娘が札幌を離れてからも毎年同じように飾っていた。

大人になった娘とはここ数年、小さな旅をしている。沖縄、福岡、大阪、神戸。東京近郊温泉巡りや北海道各地。喧嘩しながら笑いながら共に過ごす大切な時間だった。

彼女も私もそれぞれの友人の方が違う楽しさがあることを知っているけれど、敢えての母

娘旅はとても貴重であった。

可愛くて大事な私の娘。どんなことが起ころうとも必ず私が守っていくのだと生きてきた。そう思うことは私には必要だった。

そんな私の可愛い娘が人生を共にすると決めた人と先日入籍した。でも未だ私には大きな変化や実感はなくて、今夜も娘のラインを待っている。「暇電よ」とかけてくるかもしれない鳴らないスマートフォンと、お雛様を交互に見つめながらパソコンに向かっている。

悠希マイコ

◇ちくわさんロス

令和五年五月二十一日、ちくわさん（日本スピッツ）がとうとう旅立ってしまった。

ここ数年は耳も聞こえなくなり、目も白く濁ってしまった。人間の赤ちゃん用のおむつを買

い、尻尾の部分を切って履かせた。フードを柔らかくして、プラスチックスプーンで食べさせた。褥瘡ができないよう、身体の位置を定期的に変えた。夜鳴きをするので、毎晩、隣で寝ては、瘦せた体を摩ってあげた。

徐々にフードを受けつけなくなり、ヤギのミルクをスポイトで飲ませた数日後に、彼女は旅立った。十七歳二ヶ月だった。

自宅で火葬をした時には、お隣さんも手を合わせ、お花とお菓子、手紙を入れてくれた。

ちくわさんの祭壇には、アニコムからもらった一輪のブリザードフラワー、お水とクッキー、写真、パピーの時に抜けた歯、お骨が飾っている。

旅立った数日後に、旦那の枕元で、ちくわさんがくるくると回り、「ふん」とため息をつき、ドスンと寝たらしい。

その時だけは、靈感のある旦那がうらやましく思えた。

私のところには相変わらずちくわさんは現れない。きつと彼女は「お母さんは疲れているから、そっとしておこう」と気を使っていると思うことにしている。

けれども、一度ぐらいはちくわさん、私に会いに来て良いんだよ。

鮎村尚

◇早起き

私は早起きだ。低血圧にもかかわらず、毎朝四時半には起きています。本当は、もう少し眠っていたい。けれど、空や街、家族もまだ目覚めていない時間は、誰にも遠慮せず自分を無防備に解放しても許されるように思う。たとえ一時間でも、代えがたい時空を得られるのなら、多

少眠くても我慢できる。

だが、何かを日課にしているわけではない。読書をする。原稿用紙に向かう。ゆっくりリストレッチをする。昨日の新聞を読みなおす。ソフアーで膝を抱えながら大好きなグレン・グールドのピアノに耳を傾けることもある。

もつともこれは、春から秋までの話である。

冬は、この貴重な時間を除雪に充てねばならない。夫は単身赴任中だから、自分のみが働き手だ。我が家と隣家にある夫の実家合わせて二軒分。加えて、家の前道路が主な担当区域となる。ぎりぎりの四メーター道路なので、除雪車は入ってくれない。パートナーシップ制度は該当しない狭さだ。だから、少しの降雪でも、ご近所挙って早朝から除雪に勤しむ。さもないと、自分たちの車が入りできない。ゴミ収集車も入れない。救急車や消防車も来られない可能性が

出てくる。他人に迷惑はかけられない。よって、ご近所同士、丁寧丁寧に雪を片づける。道路脇には殆ど積まない。自分たちの敷地に入れて雪山を築くか。融雪槽かロードヒーティングで溶かすか。排雪業者に依頼する家もある。

結局、年中早起きループからは逸脱できない。重い雪質の日、ひと晩で大雪に見舞われた時など、途方に暮れる朝もある。それでも、日を追うごとに日の出は確実に早くなる。暁闇から朝月夜へ。東雲。朝ぼらけ。白々明け。刻々と色や表情を変えていく空に、光が細く射してくる瞬間は、見慣れているはずなのに、毎回に心を奪われてしまう。この一瞬、一瞬をいつか納得のいく描写してみたいと希む。凍て空の今朝も、私は、雪かき棒を握りながら言葉をめぐらせている。

中村郁恵

◇天使病院

昨年の事、コロナワクチンの七回目接種は天使病院となった。札幌の東区に住む者としてはこちらが一番身近な接種場所だったからだ。この病院を訪れるのは、はじめてのことだ。十月三日、十三時二〇分が予約時間で、それまで三〇分ほど一階の待合ホールに待機することになった。椅子に腰を降ろすと、目の前が中庭になっていた。ガラスの壁を透し、稚児を抱く母親の白い立像が庭の片隅にあった。これはマリアだ。

明治の北海道開拓が始まって、本州各地から移住者が集まったが、中でも北陸、東北地方から六、七割を占めているといわれている。しかし、北海道に生まれ育った人びとの気質、文化、習慣といったエートスは北陸、東北地方のそれとはずいぶんと異なるものとなった。そこ

には様々な要因があったのであろうが、道内におけるキリスト教の思想が一つの大きな影響としてあったのではないのか。

北海道農学校のクラーク先生、藤女子大学の女子教育は著名であるし、北見の開拓団北光社はキリスト教思想に由来するものだ。その活動の一つ一つを数え上げれば切りがないであろう。

その影響は教会に通う人が多いとかというような数量的な指標で測られるものではない。人間の内面的な影響というものは自身も自覚せずして心の奥底に流れ込んでいるものだからだ。そんなことを考えていると時間を忘れさせてくれた。

程なく予約番号が読み上げられ、厳かな気分が女房ともども接種会場に向かうことができた。

津坂格

◇原稿の募集

次号に掲載する原稿を次のとおり募ります。

一 募集作品のジャンル

本誌は創作を主体に編集していますが、エッセイあるいは文芸評論などを含めて募集を行っています。原稿枚数には特段の制限はありません。

二 原稿の書式

原稿のページ設定（文書スタイル）は、A4横置き縦書き一段組で、一行を四十文字、行数を三十行程度にしてください（フォントサイズ 10pt ないし 11pt で設定可能です）。

三 提出方法

「エディタ（拡張子.txt）」を最優先としますが、この場合、改行付きテキストではなく、プレーンテキスト（いわゆるベタ書き）にしてください。「ワード」もしくは「一太郎」でもかまいません。

電子メールまたはUSBメモリーで送信、送付してください。

四 原稿の提出期限

令和七年二月末日

五 原稿の提出先

0650030 札幌市東区北三十条東十二丁目
四番十七号 渡邊護

Mail:wata.m@spice.ocn.ne.jp

六 編集・発行及び配付等

本誌の編集・発行及び配付等の運営に関する事項は、別途決定します。

◇ホームページ

小誌「椽」のホームページを開設しております。アドレスは、次のとおりです。

<http://www.tennetsakura.ne.jp/>

—— 誌名命名 寺田文恵 ——

晋の国のひと王珣は椽^{てん}すなわちたる^きの
ごとき大きな筆を授けられた夢をみ
てのち、みごとな文が書けるようにな
ったという。

「晋書王珣伝」より

椽 第二十六号

令和六年五月三十日

発行 椽の会

札幌市東区北三十条東十二丁目

四番十七号 渡邊護

編集

小野寺麻理

悠希マイコ

渡邊護

印刷 株式会社誠印刷

札幌市西区八軒二条東五丁目

三番十六号